
壮学報道部物語

壮麗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

壮学報道部物語

【Nコード】

N4925H

【作者名】

壮麗

【あらすじ】

様々な事情を持つ壮麗学園最凶の問題児集団『報道部』と、それにかかわってしまった人たちの物語。・・・になる予定。

プロローグ：桜井葦名の問題

7月中旬。

夏に差し掛かり、暖かいから暑いへと気温がシフトしだし、天気もあわただしく変わっております。

この壮麗学園が誇る報道部の部室も前日からの雨が晴れ、今は夏の日差しに包まれています。

そう………

「あゝつゝいゝよ………」

部室のソファで団扇を仰ぎながらばってます。

どうもはじめまして。

壮学2年の桜井さくらい 葦名あしなです。

学園にスパイスを撒き散らす後輩と、そんな後輩の手綱を引いて学園に恐怖と悲劇とちよっぴりの感動を与える先輩を持つ、素敵でお茶目なトラブルメーカーだよ」

「ドSな博打屋の間違いですけどね」

一人だった部室に涼しげな顔で入ってきた後輩君の、開口一番の台詞だ。

「ついでに言うと学園に恐怖を撒き散らしてるのは一部の例外と部長や葦名先輩みたいな教授方公認の最凶問題児集団であって、俺みたいな人畜無害な一般人はきちんと別扱いにしてもらわなきゃ困りますね」

「ほほー？人畜無害ー？それは聞き捨てならないなー」

「最凶問題児は肯定ですか」

「まー、事実には文句言えないよね」

ぶつちやけこの学園で報道部を名乗る時点でそんなものは重々承知。「じゃ、俺が有害だとでも？」

報道部の唯一の良心に失礼な、と向かいの椅子に座ってわざとらしく首を振る後輩君。

甘いね。」

まだまだここがどういうところかわかっていないらしい。

「でわでわここで問題です。」

持っていた団扇を後輩君に向け、後ろの机から目当ての品を発掘。ここはひとつ報道部の洗礼を受けてもらうとしましょうか。

「嫌です。暑いしメンド……。」

「第一問！これは何でしょう？」

聞いてねー。とか言いつつきちんとかっちに注目する。

こつゆうところは素直でいい子なだけだねー。

「……こないだの記事ですか？」

「正解！後輩君の初仕事の記事でもあるよ。いやー、ご苦労様」

「学園内の女子半数以上を一人で聞き込みでしたからねー……」

。正直もうごめんですね」

苦笑しながら頬をかいてる。

おーおー、照れちゃって。

まー、大変だった分達成感もあったんだろうねー。

素直に感謝しないまでも、否定はしないってのが彼らしー。

「つか後輩君って何ですか？今更」

「自己紹介も済ませてないうちに出てきたほうが悪いのだよ。では第二問！」

怪訝な顔をする後輩君。

先に私の自己紹介にツッコミ入れって何を今更。

今度は壁に掛けてあったスケジュール表を取って見せる。

「恐怖の報道部の筆頭。部長の今日のスケジュールは何でしょう！」

「………宣伝？」

スケジュール表を覗き込みながら確認している。

むふふふ。

「これ？何の宣伝ですか？」

「君の宣伝だろうねー」

「俺の？」

「そ。後輩君はここがどういふところだかわかってるよね？」

「報道部ですよね？」

「そうじゃ無くて。あたし達みたいな生徒にとってってこと」

「ああ、そっちですか。……最後の皆ってところですか？
ちよつと間があつたのは言葉を選んだのかな。

「一部じゃ”掃き溜め”なり”隔離塔”なりひどい言われようもある
しねー」。

後輩の愛を感じるわー」

「そう！ここは報道部としてはもちろん。私たちみたいな事情があ
つて退学寸前の生徒が”学園への奉仕活動”という条件付で首の皮
一枚を繋ぎ止めてる最後の皆！よってこの部をやめることは必然的
に退学にもつながる！」

「ま、俺は別ですけどね」

ビシッと団扇を突きつけてやってるのになんと薄い反応。

確かにそうだけど、それが甘いだよ。

「本当にそうでしょうか？」

「？………どういう意味ですか？」

むふふふふ。と口元を団扇で隠しながら怪しい笑い。

後輩君の表情が引きつっている。効果は抜群のようだ。

「こないだの取材。君は確かによくがんばったよ。一人で百人以上
の女子に声を掛け捲ったんだからね」

後輩君は黙って次の言葉を待っている。

けど額の汗はさっきまでの暑さから来るものとは違うみたいだね」

「でも、見ようによつては君はそれだけの女性を一齐に口説きにか
かったとも見えるよね？」

「そ、そんなわけつ………！」

「そうだね」。確かに普通はただの取材としか思わないよね。別に
どこかへ連れて行こうとしたわけでもないし、連絡先を聞いたわけ
でもない。けどね？後々こんなものが記事になるとどうでしょう
か？」

私は立ち上がってホワイトボードにでかでかと記事っぽく文字を書いていく。

『壮学始まって以来！？すべての女子は俺のもの！うわさの変態紳士新人生K、学園中の女子に声を掛け捲り……』

「待ていつ……！」

書いてる途中で言いたいことはわかったらしい。

「そうやって俺も問題児の仲間入りをさせようって訳ですか？絶対にさせませんよ!?」

拳を握り締めて叫ぶ後輩君。

彼がここまで暑く、いや熱くなるとは、そんなに嫌か。

変態紳士。

「そっかー。でも残念ながらもう遅いよー。もうとっくに宣伝始めちゃってるだろうし」

「な！遅いって今日そんな記事はどこにも………宣伝？」

「うん。だって部長の策だし。張るんじゃないかってきつと本人が持つて宣伝しまくってると思うよ。変態紳士」

「……!?」

親指立てて返事をしてあげた直後に全力で部室から出て行く後輩君。その足音が聞こえなくなると、私はまたソファーに寝転がった。

「ま、嘘だけどね」

その場の思い付きでちょっと脅かしてあげようと思ったけど、あんなめちゃくちゃな筋書きでも血相変えて走っていくとは、こりゃ取材した中に気になる子でもいたな？

むふふふふ。

思わぬ収穫だ。

これはよく調べておかなければ。

なんてことを考えてると、また部室のドアが開いた。

「お、後輩君もう気づいたの？」

「何のことだ？」

起き上がってみると、アイスをはおばりながらセンスを仰ぐ部長が

立っていた。

「あ、部長お帰りなさい。授業もう終わったんですか？」

「ああ、どうせ出席もとらんような授業だし言ってることも意味不明だからな」

自主休校ですか。

またの名をサボりと。

「そういえばサークル塔をものすごい勢いで飛び出してったやつがいたが？」

「ああ、会ったんですか？」

「すれ違ったただけだな」

んじゃ、まだ気づいてないのかー。

まさか自分と行き違いで探してる本人が来るとはね。

これも灯台下暗しってやつかな。

違うか？

「ところでこれは何だ？」

「へ？」

部長がまじまじと見つめているのはさっきのホワイトボード。

「ああ、実はかくかくしかじかで」

「・・・・・・なるほどな」

「あ、まさかほんとにやったりはしませんよね？」

「当然だ。それではあいつのした仕事自体を汚すことになる」

「ですよー」

よかったねー、後輩君。

君の学園生活はまだまだ安泰のようだよ。

「そんなことをしなくても、やつが俺から逃げることなどかなわん。報道部の洗礼はまだまだこれからだ」

・・・・・・うん。

がんばれ後輩君。

第一話：糸瀬牧の日常

未だ7月。

この鬱陶しい天気はいつまで続くのやら。

シャツだと寒いが一枚着ただけで熱くてやってらんない。
講義室というのはどうしてこうも空調が下手糞なんだ！

「やってらんない！」

壮学1年糸瀬^{いとせ}牧^{まき}です。こんにちは。

「ダウン早いねー」

授業が始まり現在10分が経過。

早々に見切りをつけて机に突っ伏すと、隣のガリベンが苦笑してこっちを見た。

「ガリベンじゃない！遠藤^{えんどう} 香奈子^{かなこ}です！」

「ん？知ってるよ。どしたの急に？」

「いや、あなたに任せると絶対私の紹介なんてしないだろうから、先にね？」

「さすが親友。わかってるね」

「その親友をないがしろにしすぎでしょ」

拗ねたように黒板のほうへ向き直りまたノートをせっせととり始める。

相変わらず真面目なことだ。

ノート作りを高校でとくにリタイアしたあたしにはとても真似出来そうも無い。

今のあたしにとってノートは落書き帳であり、プリントをはさむためのファイルでしかないわけだし。

「ここにいてだけでもしょうがないか……」

「どうする気？」

あたしの独り言に不穏な気配を感じたのか、香奈子が振り向いた。
「隙を見て脱出する」

「またそれ？これで抜けれる教科フルコンプリートだよ！？」

教授の隙をうかがうあたしに呆れながら抗議してくる。

許せ友よ。

悪いのはこの部屋の空調と面白くない授業とあたしの頭だ。

ちゃんとわかってる。

「テスト前にはちゃんと勉強して単位はとるよ。あたしは一夜漬けの神だ。心配は要らない」

「そんなこと言っただって、結局は大事な知らせ聞き逃したり、演習忘れてたりして気がついたときにはもう手遅れ。なんてことになるの！高校のときと同じ感覚じゃだめだってもう何回も言っただでしょ？」

「うー。まあ、確かにそれは何度も言われたし、あたしもこれから真面目に勉強してストレスとはおさらばだ！とか意気込んでたときはあるけどさあ。正直、この現状で真面目に勉強する気になるか？」

そういつて講義室全体をぐるっと見渡す。

生存者はわずか数名。

他7割近くが見事に撃沈。もしくはケータイ。ん？うわ、ゲーム機持参のつわものもあるわ。

「うーん……」

さすがの香奈子もこれには返答に困るか。

まあ、そうだろう。

「ぶっちゃけ香奈子この授業面白い？」

「いや、全然」

あっさり肯定された。

まあ、ここまで無駄話に付き合ってる時点でそうだとは思ってたけど。「んじゃ、そういうことであたしはオサラバするよ。何かあったら後日連絡よろしく」

「別にいいけど、どこ行く気？まだ授業残ってるし帰るわけにも行かないわよ？」

「あ」

うん。

確かにそうだ。その後のことをまったく考えていなかった。そんなあたしの様子をやれやれと溜息を吐いく親友。

あたしは仕方なくその隣に座りなおした。

「部屋にでも行くのかと思ったわ」

「それは無いから」

香奈子の呟きを速攻で否定する。

もともと入りたく入ったものではない。

「誰があんなところに好き好んでいくものか！」

「けど、行かなきゃ退学なんですよ？」

「うぐっ！」

痛いところを突かれた。

確かにそのとおり、あそこに行かなければこの学校自体から追い出されてしまう。

「くそ〜！何でよりによつて報道部なのよ！奉仕活動ぐらい他にもいくらでもあるでしょうが！何であたしがあの偏屈眼鏡にこき使われなきゃならないのよ！」

あたしが苦悶の表情を浮かべ机でのた打ち回っていると、隣から小さな笑い声が聞こえた。

「何故笑う！」

「ふふ。だって、そういつつも牧って本当に嫌なことは絶対にやらないじゃない？でも結局は報道部で手伝ってるってことは、まんざらでもないんじゃないかなーと……」

「そんなことあるかあ！」

思わず大声で否定すると、香奈子はどっちもいいけどね。と視線を戻した。

「私は牧が残ってくれたから、それでいいーや」

隣でそう小さくつぶやいた声はしっかりと聞こえていた。

「おい……」

ただちよつと恥ずかしかつたから。

「おいっ！」

なんて返すか迷つてた・・・。

「おいっ！！！聞してるのか！」

「何！うるさいわね！！！」

振り向いた先にいたのは・・・教授？

「うるさいのはお前だ！騒がしいからもう出て行け！」

「あー・・・・・・・・、すいません。ついっつかり・・・」

「うっかりでお前は叫ぶのか？授業中にノートもとらないで何をしてたんだか・・・・・・・・」

まずい。

このおっさんすごくメンドクサそう。

隣になんとなく視線で助けを求めてみるが、こつちをまったく見ることも無くノートをせっせととっている。

急にそっちに戻つたのはそういうことかこの薄情者！

「聞してるのか！？ともかく出て行け！お前見たいのは邪魔だ！」

「は？」

なんだとこの薄らハゲが。

「誰が邪魔ですか？」

「な、なんだ？」

「だ・れ・が・邪魔だつて？」

「・・・・・・・・ともかく出て行け！授業にならん！」

ちつ。逃げやがった。

けど、人を邪魔扱いしといてただで済むと思うなよ。

あたしから離れ教壇へ帰っていく教授を荷物をすばやくまとめて追う。

教壇に着いたところで、振り返ると目の前にあたしがいて若干後退っていた。

情けない。

「なんだ！早く出て行け！」

こいつはそれしか言えんのか……。

「お邪魔だったようなんで行きます」

そして一礼。

それを見て教授に気の緩みが生じる。

その隙を逃さずあたしは一瞬で獲物を捕らえた。

「それじゃ、さよなら」

目の前で生徒が急に自分に迫ってきた。

それだけでがたがたと教壇の後ろでバランスを崩した教授に、笑いをこらえながら、あたしはそういつて講義室を出る。

獲物は妙に気持ち悪かったので講義室に捨ててきた。

これで早速欠席か。

ま、一回ぐらい大丈夫だよな。

牧がいなくなつたとたん教授はよたよたと立ち上がり、咳払いをして授業に戻った。

しかし、講義室はもう今のでクスクスという笑い声がそこかしこからもれ、とても授業になるとは思えない。

「私もついでに出ちゃえばよかったかなあ……。」

なんてことを思いながら、ノートをとる手を止めたとたん、静かにしなさい！と教授の怒鳴り声が響いた。

一瞬は静まり返る。

そう思っていたが、そのとたん講義室は笑いに包まれてしまった。

苛立ちも限界に着たのか、教授はそのまま授業を中断して帰ってしまった。

確かに悪いのは牧なのだけど、あの教授も口が悪すぎる。

自業自得だと思っしてほしい。

ところであの人は気づいてたのかな。

牧に自分のカツラをむしりとられていたことに。

あの頭を見せながら笑うなというほうが無理があると思うし、気づ

いてなかったよね。やっぱり。

「すごいねあの子。知ってる？」

「え？知らねーの！？あれ報道の糸瀬だよ？」

「え、そうなの！？あの同級生全員殴り倒したってゆう？」

「一人でどっかの組と喧嘩したって話もあるらしいよ。あのヅラ取るときの早さみたつしょ？あんなの糸瀬しかいねえって！」

「さっすが報道部だねー」

「見た目はそこそこかわいいのになあ」

彼女の噂話をしながら教室を去っていく生徒たちの中、私はしみじみ思うのだった。

「やっぱり牧がいると飽きないわ」

第二話：新史典孝の朝

7月下旬。

毎日のように続いた雨も、たまに晴れては気持ちのいい朝を引き立てる。

授業直前に起きるような輩には味わえぬものだろうがな。

「部室で徹夜明けのコーヒー飲みながら言っても全然爽やかじゃないですね？」

「どちらかといえばハードボイルドな男を演出したかったのだ。爽やかさではお前と路線が被る」

あははと笑って同じコーヒーを啜る同級生は2年の折笠 おりかさ 雄一朗 ゆういちろう。
もちろん報道部員だ。

爽やかなのは外見だけでなく、中身も絵に描いたような好青年。

そのルックスを存分に活かし女性はもちろん、当たり障りの無い態度で男性への評価も良好。

学園内でもトップクラスの美青年なのは間違いないだろう。

何より頭の切れも良く、その判断力は我が部には不可欠なものでもある。

「褒めすぎですよ。部長」

「たった数行の解説で過ぎることなどあるか。お前も自分の価値を把握してないわけではないだろう？俺相手に謙遜なんぞするな」

「だったら部長こそもう少し自分をしっかり評価してあげたらどうです？」

「………どういう意味だ？」

わかってるでしょ？と笑顔で返してくる雄一朗。

痛いところを衝かれたが、そういう人の表に出てきていない側面を察知するのも奴の長所ではある。

「善処している」

それだけ返してコーヒーをまた啜る。

自己紹介が遅れたな。

壮麗学園2年報道部部長新史 あらふみ 典孝 のりたかだ。

現在部室で記事の作成を終えたところ。

結局徹夜になってしまったが、学園内の記事は最低半月に一度は出さねばならない”条件”だ。

我々が学内に残り、報道部を維持するためにもこれを欠かすわけにはいかん。

途中で逃げた阿呆もいるが。

「そろそろ見回りが来ますね。部長、授業は？」

この部室も含め、文科系のサークルはサークル塔の中にある。

そしてそのサークル塔は原則寝泊り禁止。

明け方ごろには見回りが来て、忍び込んで作業をしているものや、酒をかつくらい遊びほけている連中は一同に罰則を受ける。

まあ、至って甘い点検なので内から鍵でも掛けて静かにしていれば問題なくやり過ごすことができる。

ちなみに我が部でもOBによって隣室に二段ベッドが設置され、一階は物置。二階には仮眠用の布団が敷いてある。

「午前中には無い。だが、今日は朝から動かなければならないんだ。こいつを飲んだら記事を張りに行つて待ち伏せだな」

「今からずっとですか？彼女が来るのがそんなに早いとは思えませんけど？」

驚いた表情をする雄一郎。

俺の行動がどうやら相当以外らしい。

「例外は常に考慮に入れておくものだろう。見回りが来てる中戻ってくるのもリスクが高いしな。何をそんなに驚く？」

「……………いえ。部長がそこまで気合が入ってるのも珍しいと思っただけですよ」

少し考えてからそう笑顔で答えた。

言葉以上の意味を籠めたつもりはなかったんだが、どうやら何かを悟ったらしい。

「計画を実行する上で気合など抜いたことはない。それじゃ、俺は生徒が来る前にこいつを張ってくるぞ。シナリオの大事な第一手だしな」

「そうでしたね。ああ、でもそれを張ったら一度戻ってきてもらえませんか？何か朝食でも作っておきますから」

部室の棚にはカセットコンロをはじめ調理器具のほとんどが収納してある。

冷蔵庫は基本的に大学のサークルには提供され、食材も常に用意されているため部員のほとんどが料理をできたりもする。

俺のような例外もいるが。

「お前一人で食べるといい。さっき行ったように戻ってくるつもりは無い」

「女性を誘うのに、手ぶらじゃ心もとないじゃないですか」

卓上の記事を丸めて持ち去ろうとする手が止まる。

「別に誘いに行くわけではあるまい。むしろ挑発して扱いやすくするのが今回の目的だ。飯などもって行ったところで……」

「お腹も満たせない人に、心を満たすことなんてできるでしょうかね」

そう微笑んでコーヒーをまた一口。

雄一郎の笑みに確信を得たというものを感じた俺は大きく溜息を吐いて記事を丸めた。

「冷蔵庫の在庫は？」

「弁当を作るにはちよつと彩りに欠けるけど、三人分はある筈ですよ」

「なら朝食は取りに戻る。俺の分だけでいいから置いていてくれ」「いいんですか？」

微笑んでよりうよりはもはやニヤニヤといってもいいだろう。どうにもしつこい。

「材料だけ余っていれば十分だ」

部室を出て行こうとする足を止めて振り返る。

「そいつで料理の練習でもするさ」

明らかに効率が悪くても、人の力に頼りたくないこともある。
そんな心情を悟ってか、雄一郎は黙ってうなずくと、それ以降は何も言っていないかった。

「・・・・・・まだまだ時間がかかりそうですね」

だから最後にわずかに聞こえたのは奴の独り言なのだろう。

第三話：糸瀬牧の憂鬱

7月下旬。

久々に気持ちのいい朝だ。

朝から雨に憂鬱にさせられてた日々ともこれでおさらばっ！

久々の朝日とともに、清々しくいざ登校！

「……………といければいいんだけどねー」

あー……………行きたくない。

どうも牧です。

二回目なんでもう「マキ」でも問題ないよね？

カタカナのほうが変換楽だし。

現在朝7時。

いつもなら授業寸前に起きて顔だけ洗ってダッシュのはずなのに、今日はシャワー浴びて朝食食べてしっかり着替えたというのにまだ時間が余っている。

……………ん？いつもパジャマで登校するのだった？

違う違う。登校できる格好でいつも寝てるの。

あれ？

それだと着替えたらパジャマで登校？

いやそんなばかな。

……………どうでもいいや。

今はそんなことより。

「あの記事どうなってんのかな……………」

そうなのだ。

昨日嫌々ながらも参加した部活で作った記事。

それがどうにも気に入らなかつたあたしは、そいつを破り捨てて逃走してきてしまったのだ。

あの記事が完成しなければ報道部は廃部。

もちろんそこに所属していた部員たちは解散となり、それはあたし

らみたいにあそこがあるから学園に留まれてた奴らには退学と同じなのだ。

「しかも頭に来たとはいえきれーに粉々にしちゃったからなー。別なの作って間に合ったとしても、あたしだけ責任くらって退学ーって言われても反論のしようがないよー」

登校するなり「退学！」などといわれて追いつ返されるのかと思うとそりゃ行きたくもなくなる。

しかも最悪あたしのせいで報道部の奴らまで退学となれば、いくらあいつらでもさすがに申し訳ない。

まーどう考えてもあたしが悪いから仕方ないんだけど。

だからといってあの記事を認めるほどあたしは無責任な人間じゃない。

あれが張り出されなかったのならと思うと別に後悔することだけでもない。

「・・・うだうだ考えてんのも柄じゃないか。とりあえず確かめるだけでも行ってこないとね」

とにかく記事が張り出されてるかだけでも確認しなければ。

さすがに同じのが張られてるってこともないだろうけど、万が一そうなら、まだ人の少ないこの時間に始末しなければならぬ。

そう思って記事が張られてるであろう掲示板まで来たのだが、少ないどころかいたのは一人だけだった。

「随分と早起きだな？」

そう、最悪の一人。

「自分がしたことの結果を見にきただけよ。完成は・・・したみたいね。新史」

「ああ、部長を呼び捨てにする上、作業の邪魔までしてくれるすばらしい新人生のおかげで徹夜となったがな」

とりあえず心配が一つ減ったと内心安堵したが、眼鏡越しの睨みつけるような視線がやけに痛い。

言い返す言葉がないのは悔しいが、謝ったりもしない。

それなら最初っからそんなことはしない。

「黙ったままとは珍しいな。てつきりまた力づくで破り捨てに来たのかと思っただが？」

苦い顔で睨み返していると、大げさに溜息を付いて更に挑発してきた。どういいうつもりか知らないが、こいつらしくないな。

「そう思ってなおあんた一人で待ってるなんて、あたしも随分なめられたもんね」

全身に滾っていた力を抜いてそう返すと、新史の表情がわずかだが変わった。

そんなものに食いつくとも思っただか。

数人の集団に囲まれてならまだしも、相手は一人。しかもそれがこいつという状況で挑発なんてされても、警戒して逆に冷静になるっ
てもものだ。

「意味は違っても、なめられてたのは本当みたいね」

「ああ、確かにそうだな。生半可な挑発をして悪かった」

謝罪はしても態度に変化は無い。

本当にそう思ってるのかこいつは？

嘘をついてる気はしないが、態度が明らかに違いすぎてまったく信用できない。

「昨日破り捨てた物を性懲りもなく作り直した奴に対して、お前がそこまで冷静だとは正直思っても見なかった」

な………に？

改めて掲示板に目をやる。

………なんて奴だ。

この記事をあれからの短時間で作ったことは凄い。
だが、あたしが思ったのはそんなことじゃない。

こいつは、昨日あたしがあれだけ否定した記事を躊躇うこともなく作り直し、堂々と大衆に触れる掲示板へ貼り付け、あまつさえ否定した本人が来るとわかって待ち伏せていたのだ。

「………腐ってやがる」

怒りによつて声が抑えられる。

ここまでむかつく喧嘩を売られたのは初めてだ。

「こんなやり方ができるほど腐った奴らとは思ってなかったわね！」

「やはり、見えてなかったただけか」

予想通りとでも言いたいのだろうか。

新史はそう言っただけで表情一つ変えずにこつちを見ている。

「他人の恋愛沙汰の記事がそこまで気に食わんか？」

「当たり前よっ！大体その子は他人じゃない！あたしの友達よ！」

記事に張られた写真に写っているのは谷内たにうち 京花きょうか。四月から既に学

園にほとんど姿を見せていない同じ学科の生徒だ。

そして、その上におちよくるようなピンクの太い字体で『熱愛発覚

！？』の根拠のない文字。

そう、根拠なんてない。あるはずがないのだ。

「この子はこの学園に入つて初めての友達があたしだつて言つてた

！その翌日に学園に来なくなった子にどうやって学園で恋愛ができる

つてのよ！？こんなありもしないでっち上げの記事！黙って見過

ごせるか！」

「昨日とまったく同じ台詞だな？」

「なっ・・・！」

大学に上がつて初めてまともに会話した子。

だからこそ気になり、しかしどうしていいかわからずにもやもやし

ていたこと。

それをこんな形で穿り返され、あたしは昨日とまったく同じ、パニ

ックにも近い怒りに駆られていた。

指摘されて始めてあたしはそれに気づき、若干だが怒りが引いた。

「・・・あたしにどうしろつて言うのよ」

こいつは昨日あたしが破り捨てた記事を変えもせずこうして張り付

けた。

なら、ここで同じように破り捨てたところで、またこいつも同じよ

うに翌日にはこれを貼り付けているはずだ。

状況を変えるには昨日と違うやり方じゃなきゃいけない。

こいつもそれを見越してこんなことをしたんだろうから、何か望みがあるんだろうよ。

無謀な挑発も昨日と同じようにあたしを怒らせて、さっきの言葉を印象付けるため。

本当にむかつく男だ。

破るだけのあたしより作り直すあいつの方が不利なのだから、このまま続けても……とは思ったが、下手をすればこいつは卒業までの4年間ずっと同じことをしかねない。

「この記事の改訂版を作る手伝いをしてもらう。今日の授業が終わり次第ここに書かれた場所へ来い。改訂版ができればこの記事は好きにしかまわん。作り直しもせん」

新史は記事の横に小さなメモを貼り付けるとそのままどこかへ行った。

あたしは黙ってそれを見送った。

いや、それが限界だった。

少しは冷静になったとはいえ、元々気の短いあたしがここまで頭にきて自分を抑え続けるのは最早限界だったのだ。

「堪えろ……堪えろ……堪えろ……」

新史の姿が見えなくなるまでそう呟きながら、飛び出しそうな体を抑える。

その姿が見えなくなってもしばらく腕から力は抜けず、あたしは深呼吸を繰り返した。

そして、ようやく体が落ち着いたとたん、今度は猛烈な悔しさがこみ上げてきた。

「……畜生」

存在自体が許しがたいポスターの前で溢れた涙をぬぐい、隣のメモを破り取る。

簡単な地図と住所。

矢印の場所には集合時刻と。

「・・・・・・ここって！」

『谷内低』という文字が書いてあった。

「・・・・・・低？」

第四話：押しかけ取材班

午後6時。

朝の一件以来気分が滅入ってしょうがない。

覚悟はしていたとはいえ、まさかあれほどまでに睨まれるとは。

余計なことをしてその後の涙さえ見てしまっただけは最早……。

しかし泣き言は言ってられん。

まだシナリオは動き出したばかりなのだ。

たとえ相手が誰でもどんな状態であろうと、俺は俺であり続けなければ。

「来ていたか」

谷内邸のある通りに出ると、遠くからでも見覚えのある制服が仁王立ちしているのが良くわかった。

正直、確実に来るといふ保障が無かった。

それ故に内心でほっと安堵しながら近づいていく。

「しっかり来たようだな」

「新史！こんなところに呼び出しといて遅れるってどういふことよ！」

俺を見つけるなりこっちに詰め寄ってくるマキ。

遅れた？こいつの授業が終わる時刻は多少の誤差はあれど6時。

ちらりと時計を確認するが今は6時ジャスト。

時計が遅れていないことは毎朝チャックしているし、ということは……。

「自分が早く来すぎたのを俺のせいにされても単なる八つ当たりにかみえんのだが」

「その何が悪いのよ！」

八つ当たりだ。

「どんな状況であれ男が女を待たせていい分けないでしょ！？」
限度ぐらいあるだろう。

「大体第一声は普通遅れた理由と謝罪じゃない!?」
だから遅れたわけじゃない。

と、無駄に話を長引かせる言葉は心中に留め言葉のラッシュが切れたところで本題を切り出した。

「それは悪かったな。で、早速本題に入りたいんだがいいか？」

「誠意がこもってない!」

込めてないからな。

「今日は谷内京花への取材が目的だ。お前にはそのアシストを覚えてもらう」

ツツコミを完全に無視して切り出す。

最悪拳でも飛んでくると警戒していたが、どうやら唸りながら睨むくらいで勘弁されたよう……。

「ぐうはっ!？」

「……わかった。で、具体的には何すればいいの? 会話の内容をメモでもしておけばいいわけ?」

無言で踏み込みの入った正拳突きなんぞ喰らわせておいて、涼しい顔で尋ねてくる。

急所的に確に入れておいて答えられるとも思ってるのか!?

「くっ……! はあ……、それは……、閉まっておけ! 今回は使わん」

「はあ? じゃあ、何よ。録音でもするの?」

マキは取り出したペンとメモをしまい顔をしかめる。

それにしてもこいつにとってさっきのはただのツツコミのレベルだったのか?

流石にこれを毎回喰らってでは体が持たん。

もう少し保身を考慮に入れて話さねばならんな。

「ふう……。今回のお前の仕事は主に見張りだ。付いて来い」

ようやく呼吸が落ち着くと予定の場所へ向かう。

「見張り?」

後ろから、不思議そうに首をかしげてマキも付いてくる。

「ああ、なんせ傍から見れば今回ののは不法侵入だからな。下手に目撃者がいられても困るし、最悪見つかった場合の口封じもいる」

「はあっ！？ちよっ、ちよっと待ちなさいよ！取材って本人に許可も取らずに押しかけるわけ？！」

「！」

慌てて駆け寄って目の前に回りこんでくる。

正直今度は後ろから蹴りでもかまされるかと警戒したが、すぐに気を取り直して説明する。

「別にいちいち殴ったりしないわよ……」

その前に悟られたらしい。

咳払いして再度気を取り直すと、谷内邸を指した。

「安心しろ。谷内京花本人には”いつでもいい”という了承を得ている。だが、ついこの間俺と龍野で取材に来たときには母親に追い返されてしまったな。だったら了承を得た本人に直接コンタクトを取りに行こうという訳だ」

説明し終えて振り向くと、マキは又もやこっちをじっと睨んでいた。今までとは違う、怒りでもなく、不可解を示すでもない目。

「何だその疑いの眼差しは？」

「あんたさ、あたしに見張りをしろってことは一人で行く気よね？」

「そうだ」

「本人に直接ってことは部屋に忍び込むってことよね？」

「そういうことになるな」

答えるなりマキはずいっと近づいていつそう睨んでくる。

「何だ？」

「新史あんた……。下心は、ないでしょうね？」

「……はあ」

こいつは……。

ここはきっぱりとっておくか。

「まったく無い」

「根拠は？」

「まずあの手のおとなしいタイプの女子は俺の好みとは少々ずれている。ああいうのも悪くないが、いかんせん彼女は身長も低めで胸囲も控えめ、所謂ロリータがはあっ！」

「もういい。良くわかった。あたしが本当に見張らなきゃいけないもんが」

「お前っ！・・・止めるならせめて口で・・・！！」

今度は腰の入った裏拳だ。

身の潔白を証明するはずだったのだが、どうも逆に睨まれてしまったらしい。

しかしこいつ、予想の倍は手が出るのが早いな。

「とにかくっ・・・！俺が信用できないならっ・・・俺ごとでいいから、お前はここで誰かがここを通るか見張っておいてほしい。万が一誰かが通った場合は適当に注目を集めてこっちに気づかれないようにしてくれ」

このままでは体が持たないと判断し、息が整い次第塀をよじ登る。

「あ、待ちなさいよ！別にまだ納得したわけじゃないし、どっちみち本人に許可取ったからって不法侵入は不法侵入でしょうが！大体注意を寄せるたって・・・」

「細かいことは気にするな。お前がきつちり役割を果たせば問題は起きん」

言い終えるなり俺は内側へと飛び降りた。

塀の向こうではまだマキが何やら叫んでいたが、無視して庭を駆け抜ける。

谷内邸については友人関係や本人からも色々と情報を得ていた。

地元の大型デパートを経営する谷内家はこら辺では割と裕福な部類に入る。

それ故に新築の家は周りとは違う凝ったデザインになっており、正方形のキューブがあちこちに突き出したような外見をしている。

わりと広い庭には監視カメラが何台か見えるが、京花本人からの話

で家に人がいる際はほとんど動いていることは無いという。
いくつかある防犯装置もまたしかり。

ばれずに家まで近づいてしまえば、突起の多い外見のおかげで二階にある京花の部屋まで簡単にたどり着ける。

「デザイン重視の設計も考え物だな」

庭を抜け家の壁に張り付くと、もと来た道を振り返る。

俺が登ってきた塀にはこっちに向かって何やら言いたそうな女子が上半身を乗せていた。

「まったく」

携帯を取り出しメールを作成。

『今目立たれると逆に動きづらいんだが、顔を出すのは人が見えたときだけにしてくれ』

思ったことそのまま送信。

やがて塀の上の影が向こう側に消え、すぐさま返信が帰ってきた。

『何であたしのアド知ってんのよ!？』

びっくりマークの後に明らかな怒りマークが踊っている。

塀からはいなくなったが、ここで下手な返事をすれば戻った後が怖いな。

少し考えてから返信。

『報道部だからだ』

他に言いようが無かった。

「さてと………」

窓の位置に注意しながら壁に沿って移動する。

時折塀の方も確認し、人が来ていないかも確認する。

ガレージの前まで来ると、真上の部屋の窓から明かりが漏れた。

「どうやら、夕食も終わったようだな」

目的の人物が部屋に戻ったのを確認し、もう一度塀のほうを見る。

人が来ていないのを確認すると、そばにあった突起に足をかけ、そっとガレージに飛び乗った。

窓のある位置までにはもう一つ別の窓が間にある。

その窓の両端にこれまたちょうどいい突起が左右についていて、窓自体もあわせて非常にバランスの悪い階段のようになっていた。といっても、幅は10センチにも満たないため、足場としてはかなりぎりぎりのところだ。

落ちればガレージの屋根で間違いなく派手な音が出てしまうため、慎重にこなさなければならぬ。

しかし、ふとそこで嫌な予感が走り塀へ視線を移す。

案の定そこにはマキが塀に体を乗せ、自分の左側を指しながら反対の手を振っていた。

「よりによって今か」

バランスを取るだけでも苦しい足場で、飛び降りればガレージ。急いで上ったほうがまだいいか？

しかし、間に合わなければこの位置では確実に塀の外からでも見えちゃう。

ここはあいつに頼るしかないか。

だんだんジェスチャーを激しくするマキ。

おそらくそれだけ近づいてきたのだろう。

すかさず携帯を出してメール送信。

『任せた』

後はあいつを信じて上るだけだ。

一つ目の突起から足を離し、完全に窓の上に乗る。

それから注意深く立ち上がり次の突起に足を伸ばす。

「うがあっ！」

と、そこで塀の向こうから低い悲鳴が聞こえた。

間違いなくマキの仕業だろうが、聞こえたのはもう少し距離のある場所のようだ。

まさかとは思うが、いくらあいつでも通りすがりの一般人をいきなり殴ったりはしないよな？

一抹の不安を抱えつつ、やっと目的の窓のそばまでやってきた。携帯を取り出し、さっきまでとは違う相手に電話をかける。

『・・・もしも？壮学報道部の新史ですが。谷内京花さん
で間違いありませんか？』

第五話：谷内京花の衝撃（前書き）

更新も展開も非常にのんびりとしたペースで進んでいます。

連載物を書くのは実を言うと初めてなので、色々と至らない点はあるでしょうが、それでも耐えられる方はどうぞ見てやってください。耐えられない方は気になった点感想などに書いていただければ、もう少しは見れるものになるかもしれません。

今更ですがどうぞよろしくお願いします。

第五話：谷内京花の衝撃

午後6時。

今日はお父さんは遅いみたいで、お母さんと二人の夕食だった。

特に何も言われなかったけれど、やっぱりまだこの間の報道部の人たちのことを気にしてるみたいだ。

報道部が私のことを持ち上げて学園に戻れないようなら、いつそ戻らなくてもいいといってくれてたけれど、きつと今のままで就職したって私は変わらない。

だから適当に誤魔化したままだ。

それに、私は報道部がそこまで悪い人たちとは思ってない。

噂では問題児の掃き溜めだとか言われてるけれど、皆が皆ひどい人ではないはずだ。

入学当初の私を受け入れてくれた彼女のように。

いつか学園にまた行った時に、そのときでも彼女は私を受け入れてくれるだろうか？

「学園か………」

溜息とともに部屋に入る。

明かりをつけてベッドの上の大きなイルカに抱きついた。

これでもう2ヶ月近くも学園には行っていない。

きつともう前期の単位は絶望的だ。

進級ぐらいいはできて二年前期は地獄のように忙しくなる。

下手をすれば一年ぐらいいは覚悟しなければならぬ事態だ。

「はあ………」

先のことを考え憂鬱になっているところに、着信を知らせる携帯がなった。

「電話？」

メールならともかく学園に行ってもいない私に電話してくる相手なんてそうそういない。

表示された番号も知らないものだった。

無視してもいいのだが、誰なのかぐらい確認しておかなければ気味が悪い。

「はい……、もしもし？」

『もしもし？ 壮学報道部の新史ですが。谷内京花さんで間違いありませんか？』

報道部の新史？

一応覚えてる。

確か前に買い物に行ったとき声をかけてきた人だ。

取材をしたいといわれたからオーケーした。

けれど。

「あの？……新史さんに番号教えてはいないと思うんですけど？」

『もう一度コンタクトを取るために必要と思ったので調べさせていただきました。この間お伺いしたときは追いつ返されてしまったので』

「あ、ああ。この間は母が失礼しました。私のことを思ってたことだったみたいなので……」

『まったく気にしていません。しかし、取材は諦めるわけにはいきませんので』

だからって普通人の携帯番号勝手に調べて連絡してくるかなー。

軽く犯罪だと思っただけだなー。

流石は報道部。

『今からその埋め合わせとして取材を行いたいのですがよろしいですか？』

「え、今からですか？……別に予定もないですしいいんですけど」

どうせ今からというなら電話ごしに質問するだけだろう。

でも報道部だからなーと、ちょっと不安にもなったけど、家に来るなら後日ってことにしてもらえればいいし、来てくれて言うなら会ってみたい気もする。

『わかりました。それでは……………』

そう。軽い好奇心もあった。
けれどそれは。

「早速始めましょうか」

かなり甘かったみたい。

「え、え？ええええええええ！」

「しっ……………」

勝手に開いた窓とカーテンの向こうに、見覚えのある眼鏡の男子がいた。

予想を完全に超えた事態に頭が回らなくて、思わず素直に口を手でふさいでしまった。

「騒ぎたい気持ちはわかりますが、ここで見つかるとお互い困ります」

靴を窓枠に置いて、堂々と入ってくるその人にコクコクと首を振って答える。

「とりあえず声は出して結構ですよ」

「あ、はい」

言われてやつと口をふさいでいたことを思い出して、慌てて離れた。
ていうか……………え？何で？

「では、早速取材に移りますが……………」

「いやいやいやつ。移らないでください！な、何で新史さんがここに？どうして私の部屋の窓から入ってきて、何で私の番号知ってるんですか！？」

て、番号の方は聞いたっけ？

いや、でもあれは。

「報道部だからです」

「あ、ああ。えつと……………、番号のほうはもういいです。何で窓から……………」

「報道部だからです」

「それも！？」

せ、説明する気はなしですか？

このまま流していいことじゃないですよっ？

「で、まず確認しておきたい情報からですが・・・」

うわぁ、はじまちゃった。

「何か気になることでも？」

色々考えてるうちにボーっとしてしまったみたいで、手帳を取り出してめくっていた新史さんがこっちを覗き込んでいた。

「あ、いいですよ。別に。何ですか？」

まあ、下にはお母さんたちも居るし。

大丈夫だよな？

私が笑顔でそう返すと、新史さんは手帳と私を交互に見た後、急に真剣な顔になって私の前に座った。

「それでは谷内京花さん。あなたは体調不良を理由に学園を2ヶ月近くも欠席していますが、仮病で・・・、間違いありませんね？」

「えっ・・・」

表情が引きつったのが自分でも良くわかった。

好奇心でこの人と接するのは甘い。

さっきそう思ったのに、どこかでまだ何かを期待していた自分を恨んだ。

この人は、知ってちゃいけないことを知ってる。

「あ・・・の・・・」

自然と顔が俯く。

声も思い通りに出してくれない。

出たとしても、何を言えばいいのかわからない。

「どうやら。間違いなさそうですね」

新史さんの顔を見られない。

けれど、私の態度でそれが確信されてしまったことはわかった。知ってる？

みんな？

皆？

皆がみんな知ってるの？

「あ、あのっ！」

「これはまだ記事としては扱っていません。これを知っているのも、学園で報道部の数人だけです」

慌てて顔をあげると、新史さんは私の考えを見透かしたようにそう答えた。

眼鏡越しに私を見るその眼が、睨まれているのかと錯覚するくらい真っ直ぐだった。

その眼を見ていると、暴れていた動機が収まっていくのを感じた。不意に首筋が涼しくなって、初めて自分が汗をかいていたことに気づいた。

「何が・・・、聞きたいんですか？」

冷静になって、ようやく会話ができる気がした。

今までのどこか舞い上がってしまった感じがもうない。

これは大事なことだ。

それを知っているこの人が、どうしてそれを確かめにここまで来たのか、ちゃんと確かめなきゃいけない。

けれど、改めて新史さんの顔を見たとき、私はまた言葉を失った。

「準備ができたようですね？」

彼は笑っていた。

第六話：糸瀬牧の奮闘

午後6時半。

疲労は既にピーク。

腕を上げるだけの動作も激痛が伴い、打ちつけた背中 of 痛みに起き上がることもできない。

足が動かないところを見ると、もしかしたらそっちも外れてしまったかもしれない。

「だらしないわねえ」

そんな奴らがそこらに沈んでいる中、あたしは仁王立ちしながら溜息を吐いた。

新史が窓際に立ったその時に、タイミング悪くやってきたのがこのチンピラ集団。

こんなのに新史が見つかれば、厄介ことになるのは明らか。

なのに新史も隠れる気すら見せないもんだから、仕方なくこいつらには消えてもらうことにした。

まあ、はじめは少し脅して追い返すつもりだったんだけど、

「ねえ、ちよつとあんた達……」

「おおっ！おねーちゃんだっ！かわいいー！！」

「マジで！？俺らになんか用？つか用だね。話しかけてんだし。俺緊張するー！」

「なにになに？こんな夜中にどうしたの？家出？だったら俺らが泊まるとこ教えてやるよー。ちよつと俺らもそこで寝る予定だったしー？」

と、飲みにも行った後だったのか、顔を赤くしたチンピラは声をかけただけで腕をつかみ、肩に手を回してへらへらと笑いながら強引に引っ張り出した。

「邪魔よ」

元々こういうチンピラはあたしの嫌いな部類だ。

注意を引き付ける以前に脅す気すらあつという間に失せ、肩に回された手をそのまま捻り上げた。

「いっつつ！いって！いってててて！！！」

一人が悲鳴を上げ、周りの男たちも離れるか近づく足を止めた。

しかし、「こいつ女に負けてやんよ」と直ぐに笑い出し、僅かに生じた警戒は直ぐに解けてしまった。

いくら酔っ払いとはいえ、もう少し緊張感ぐらいあってもいいんじゃない？

ちよつと、気に入らないわね。

「痛てえって！放せよこのっ！」

「うるさい」

捕まえてた男も痛み慣れてきたようで、何とか腕を開放しようともがきだす。

あたしは反対の手でその口の口を塞ぐと、その肩を胸の前に当て両手に力をこめる。

ゴリツと、鈍い音が出た。

「ぶぐうううううううう！！！」

口を押さえた手に悲痛な叫びが吸収される。

即座にその手を後頭部にまわすと、続けざまに水月へ膝を叩き込んでやった。

「さて」

息と一緒にいろんなものを吐き出した男はそのまま地面に倒れ動かなくなった。

いや、微かにぴくぴくとはしている。

「していてもらわなきゃ困る。」

「まずは一人ね」

倒れた奴から顔を上げると、他の奴らは完全に固まっていた。体だけじゃなく表情まで。

うん。すっきりした。

「次は誰が来るの？」

ついでに楽しくなってきたわ。

まあ。

そんな訳で。

今に至ると。

「にしてもやりすぎたわねー。いや、むしろ弱すぎたわね」

20後半ぐらいの男が5人。

多勢に無勢だったし、容赦する気なんてなかったから徹底的にやっ
たけど、考えてみたら向こうは酒が入っているのだ。

泥酔ってわけじゃなさそうだったし、事前にちよつと醒ましてやっ
たとはいえ、ほとんど抵抗らしい抵抗をされなかった。

全部終わってから気づいたことだけど。

「全員動けなくしちゃったら、あたしが運ばなきゃいけないじゃない。
い。もう少し根性見せて、せめて自分の足で逃げ帰ってよね！」

文句を言いながらも、人気のないところへチンピラ達を運びにかか
る。

一人を担いでもう一人を引きずって運ぶとして三往復。

面倒くさあ。

と、溜息を吐きそうになったところで、目の前に人がいることに気
づいた。

「け、圭一・・・？大石？お前ら・・・」

ピアスに赤シャツの男。

信じられないような視線の先は、あたしの肩と足元に。
まずい。

こいつ知り合いか！

即座に仕留めてやろうと思ったけれど、人一人担いでる状況だ。
もし逃がしでもしたらそれこそ最悪。

全身硬直したまま、この状況を切り抜ける方法を全力で探す。

男は明らかに動揺している。

頭の上にもしもない疑問符がありありと見えるくらいだ。

ああ。

そっだ、これでいこう。

一瞬目を瞑る。

気持ちを切り替え、イメージをしっかりと持って。

よし！

「あの・・・、この人たちの知り合いの方ですか？」

「え？」

声は高く小さくゆっくりと、腰と膝を少し曲げていかにも重そうに、とどめは低くなった姿勢からの見上げるような上目遣い。

「さっきこの人たちがサングラスの大人の人たちに殴られて、また戻ってくるかもしれないし、私・・・、どこかに運ばなきゃって！」

多少パニック気味に見せて深い追求は事前に防ぐ。

狙い通り男はなんとなく事情を察したのか、直ぐにマキから男を引き受けた。

「わかった。ありがとな！こいつらは俺が何とかするから、もうあんたは行っていいぜ！」

「え？でも、きつと直ぐ戻ってきますよ？仲間を連れてくるみたいなこと言ってたと思うし！すぐ逃げたほうが・・・！」

なんてことを言いつつ数歩後退。

悪いが手伝ってなんて言われたら「ごめんなさい！」とか叫んで逃げられるための準備を・・・。

「そっか・・・。じゃあ、悪いけどあんた・・・」

「あの！ごめんなさいっ！」
しといてよかった。

手伝うのが嫌とか言う以前に、全員が気絶してるわけじゃない。

「犯人があたしだってばれたらせつかく来てくれた処理係まで消さなくちゃいけないしね」

塀沿いにぐるっと谷口邸を回るように走って。電柱の影にこそっと隠れる。

これであの男があいつらを掃除してくれるはずだ。

手間も省けてピンチも脱出。

我ながら完璧な作戦に演技だった。

「あれだけの窮地を作ったのも自分だろうが。胸を張ってどうする」
伸びた鼻は後ろからの一言で一瞬でたたき折られた。

「しかも見張りが持ち場を離れてたら本末転倒もいいとこだ。おかげで折角入念に調べた脱出ルートも使えなくなっただけ」

振り返ると、腕組をした新史がこっちを睨みつけていた。

自分の不法侵入を棚上げして、なおもぶつぶつと文句を言い続けるので、ポケットのメモ帳をペシッと顔に投げつけてやった。

「痛いぞ」

「出番を奪った相手が憎かったんでしょ？大体、任せるって言ったんだから後から文句を言うほうが無粋なのよ。けど、良く出てこれたわね？」

メモ帳を拾い上げ睨み返してやると、新史も文句を言うのを止めて自分の後ろを指した。

「元からなかった出番だ。俺が奪ったわけじゃない。それに、予定が少し変わってな」

新史が指した場所。

つまり谷内邸の門に目を凝らすと、暗闇で何かが動いているのがわかった。

少しずつ近づいてくるそれが人だとわかり、その表情が街頭に照らされると、あたしは思わずその名を叫んだ。

「京花っ！」

「うん……。久しぶり、マキちゃん」

もじもじとためらいがちにこっちを見るその姿に、様々な気持ちと言葉が溢れそうになる。

散々聞いてやりたいこととか、話してやりたいことが頭をめぐるが、全てに一度ブレーキを掛ける。
目を瞑って、落ち着いて。

「…………元氣だった？」

じゃねえよ。

相手は病欠で学園に来てないのだ。
落ち着こうとしすぎて言葉の選択する余裕がなかったみたいだ。うん。

「うん。今のところ」

肯定されちゃった。

「そっか！ならいいわ。安心した」

内心で苦笑しながらも、明るく微笑んで頷いた。

京花が少し顔を上げる。

不安と疑問と恐怖が見え隠れする。

その顔を見たら、抑えておこうと思った言葉が、ついついこぼれてきてしまった。

「………ほんとほさ。言いたいこととか、聞きたいこととか、いっぱいあるんだけどね？無理やり聞いてもしようがないしさ」

あれ。なんか言ってて恥ずかしくなってきた。

京花はただ黙って聞いている。

「あたしは京花が言ってくれるの待ってるよ」

だんだん顔の温度が上がってきた。

やばいと思って背中を向け。

「学園でさ」

何とか台詞の締めまでしっかり言い切った。

「………うん。ありがとう」

背中越しに京花の声が聞こえた。

表情を見てないから、いまいち感情がつかめなかったが、少しほっとした。

同時に、飲み込んだはずの台詞が頭を巡る。

どうして学園にこないの？

来たくない理由があるの？

あの日に何かあったの？

あたしが何か悪いことでも言った？
友達を沢山作るんじゃないの？
あたしが友達じゃ・・・、嫌？

やっぱ聞けば良かったかなあ・・・。

そんな後悔が押し寄せてくるが、すぐに追い払った。

なんだかすんごい恥ずかしい台詞になってしまったが、言うことは言ったのだ。

多分伝わったでしょ。

それで十分。

「それじゃね」

とそのまま帰ろうとすると、後ろからなんともやりにくそうな声がかかった。

「いや、待て。そのだ・・・悪いがまださよならとはいかないのだが」

がくりと力の抜ける音がした気がする。

「・・・・・・・・そういえば、あんたも居たんだったわね」

「ああ、何故か一瞬で空気にされたがそれはいい。実は彼女にはこれから少し一緒に来てもらうことになっててな」

「はあ・・・、何なのもう。何！？後何があんのよ！」

あまりに空気を読まない新史に、脱力を通り越してやけになって怒鳴る。

さりげなく京花とは視線をはずしながら、新史に詰め寄ると、さっきまでのばつの悪そうな感じが抜けた真顔で答えが返ってきた。

「デートだ」

・・・・・・・・。

「はあ？」

第七話：新文典孝の苦悩（前書き）

展開も更新頻度も相変わらずの超スローペース継続中です。

けど流石に7話まで来てこの進行度はちよつと作者としても想定の範囲外ですので、仕事が急激に忙しくなったりしない限り次話ぐらいからペースを上げてこうかと思えます。よって、今回もやっぱりのんびり展開です。

第七話：新文典孝の苦悩

午後7時。

都会の地下鉄と違ってこの町の電車は一本一本の間隔が長い。

次の電車を待つのに一・二時間待つことなんてざらだ。

例外を考慮した上で行動し、わずか30分程度で目的地に着いた自分を少し誇らしく思うほどだ。

多少早まってしまったが、これくらいの例外で計画が破綻するほど我が部は脆くもない。

連絡を入れてから時間も経ったし、向こうももう動いているはず。「で。デートってどういうことよ？どうやって出てきたかもまだ聞いてないし。そもそもあたしは取材以外を手伝う気なんて毛頭ないわよ！？」

そんな気分もつかの間、電車内での問いを「静かにしろ」の一点張りでかわしていた反動か、降りた途端にマキは眉間に皺を寄せて詰め寄ってきた。

待ち合わせの場所まではそう遠くないが、あまりに近づいた顔に反射的に顔をそむけ歩き出した。

「そう焦るな。お前がチンピラとやりあってる間に、こっちにも母親が部屋に來たりと大変だったんだ。脱出できたのは彼女が母親を引きつけ、別の脱出ルートを教わったから。これはその代償……・・・といったところか？予定には無かったが友人の頼みだ。少しくらい付き合え」

自分達の少し後ろを何も言わずに付いて来る谷内を指しそう言うところ、マキは困惑した表情で後ろを振り返った。

珍しい。

マキが声をかけるでもなく、無視するでもなく、ただじつと様子を見ていた。

マキと俺の付き合いは非常に短い。

彼女が報道部に入ったのはちょうど6月に入った頃。

しかし、マキが自ら部に来ることなどまず無く。呼び出されて掃除等の雑用をこなしても、さっさと帰ってしまうので他の仕事など触れる気すら見せなかった。

本人には言っていないが、たまにしか顔を見せないうえ、雑用しかこなさないマキが報道部として残っていることに異議を唱える教授もいるほどだ。

まあ、その教授にも問題は多々あるゆえあまり危険視するほどでもないが。

・・・・・・とにかく。

そんな奴だが、俺は彼女のことを入学したときから既に知っていた。特別なことがあったわけではない。

報道部としての俺には全生徒の情報をある程度キープしておくのは当然だったのだ。

それから現在に至るまで、マキの人間性はある程度把握しているつもりだった。

だが、こうして他人に接するのに迷いを見せるマキは、少なくとも今までの俺の記憶には無い。

「代償って・・・・・・。それが何であんたとのデートなのよ!？」

「ん?・・・・ああ」

不意にこっちへ視線を戻され、思わず足が止まりそうになった。声がやたら小さくなっているのは後ろを意識しているのだろう。

「ま、あれだけの台詞を吐いた後に堂々と話しに行くわけにもいいんか」

「な、何の話よっ!?!」

小声で苦笑したつもりだがしっかりと聞こえていたようで、すぐに隣から反論が飛んでくる。

しかし、ちらりと見えたその顔が、らしくも無く赤くなっていた。

・・・・・・たまらん。

「ちょ、ちょっと新史!？」

自分のできうる限りの早歩きでその場を離れる。
まずいますまずい。

頭から計画のことどころか全部すっ飛んでしまいそうになった。
冷静になれば俺！今は耐えろ！すっかり覚えておいて後で思い出そう。
「ちよつといきなりどうしたのよ？」

後ろからマキと谷内が小走りで近づいてきた。

マキはともかく谷内とは少し距離が開いてしまったので、少し足を止めて待つ。

ついでに深呼吸して舞い上がったテンションも押さえつけた。

「……………ただのデートではない。これは彼女が学園に戻るためだ」

「京化が……………戻るため？学園に？」

「そうだ。飯にも2ヶ月以上学園に来ていないのに、「ただの病気でした」で信用する輩がどれほどいると思う？妙な噂が立つ前に、相応の事実を作ってしまう。そうすれば根も葉も無い噂など、どうにでもできる」

「はあ、どうしたんですか！二人とも！はあ、置いていかないでくださいよ！」

何とかそれだけ説明すると、まだ何か聞きたそうなマキの言葉を遮るように谷内が追いついてきた。

「すまなかつた谷内さん。置いていくつもりはないから安心してほしい。で、いよいよご対面だが準備はいいか？」

「へ？」

膝に手をつき肩で息をする谷内に謝罪しながら、進行方向十数メートル先に迫る人影を指すと、間抜けな声が二つも聞こえた。

「誰もデートの相手が俺だとは一言も言っていない。あれが谷内さんを今日エスコートする彼氏役だ」

「あれ、て折笠先輩！？」

「わあ……………」

「やあマキちゃん。昨日ぶりだね。谷内さんは初めまして。2年の

折笠雄一郎です」

「あ、あの……。初めまして！」

やってきた男に目を丸くするマキ。そして差し出された手に顔を赤らめながら握手をする谷内。

「ちよ、ちよつと新史！？どう考えても人選ミスでしょ！2カ月学園に來なかつた理由があゝの折笠先輩と付き合つてたからだなんて、余計に敵を増やすだけじゃない！」

雄一郎と谷内が挨拶を交わしている間に、小声で猛抗議してくるマキ。

どうでもいいが今朝受けた頭の切れる印象がすっかり失せてきたな。「そうでもない。雄一郎ならば彼女の印象を悪くすること無く生徒の間にその事實をすんなりと受け入れさせるだけの器はある。だが、あいつと付き合うとなるとそれとは違ふ意味で彼女にとんでもない負担がかかるからな。あいつは彼を連れて來ただけだよ」

「彼？」

またも素つ頓狂な声を上げて雄一郎へ向き直るマキ。

そこには雄一郎に少し遅れてやつてきた、長身の男子が立っていた。「こんばんは。2年の島野しまの 浩介こうけです。折笠さんにはお世話になりました」

「ああ、どうも。でも別に頭なんか下げなくていいわよ。世話したのは折笠先輩であたしじゃ……。いたっ！」

「ただの挨拶ぐらい素直に聞いておけ！」

マキにチョップをかまし、ひるんだ隙に雄一郎が会話に入つてきた。「それにしても、遅いですよ部長。三人が来るまで無理やり彼を引っ張つてきた俺は完全に悪者だつたんですから」

「無理やり引っ張つてきたのは俺じゃない。それにここには連絡してからすぐの列車で來たんだぞ？お前達が早すぎたんだ」

「屁理屈は俺には通用しませんよ？それに、間に合わないんだつたら今すぐなんて連絡しないで下さい」

「……………確かにな。悪かつた。今後注意する」

やはり勝てんか。

どうにも、こいつと口で勝負となると相性が悪い。
溜息で一呼吸おくと、声を少し小さくする。

「ところで、筑紫場と葦名はどうだ？何か連絡は？」

「了解。動く」それだけは聞いてます」

「そうか」

頷いて声量を戻す。

奴らもうまくいっていれば、今回の計画にまだ破綻は見られない。
やはり心配は要らなかったか。

「で？彼女には？」

「説明はしてある。そっちこそ、一日予定が早まったんだ。大丈夫なのか？」

「問題ありませんよ。彼はね」

そう言つと、笑顔でまだ挨拶も交わしていない二人を見た。

「まあ、お前がそこまで自身を持って言うのだから、信用するほか
無い」

「嬉しいですね。そう言ってもらえると」

そして、こつちにも爽やかな笑顔を見せた。

さっきの自信を含んだものではなく、本当にうれしそうな笑顔。

「そんな表情をしたところで俺は落とせんぞ」

「ははは。百も承知です」

真顔でそう返すと、折笠は苦笑して頬をかいだ。

「二人とも勝手に話し込んでんじゃないわよ！あたし一人にこの状
況どうにかできると思ってたの？！」

そこへ痺れをきらせたマキが割り込んできた。

あの二人はまだ会話にも発展している様子は無い。いたたまれなくなつたのだろつ。

「そうだな。じゃ、行くか」

「そうですね。行こうかマキちゃん」

「え？ちよつと二人とも！？」

俺達がそれぞれがマキの両脇を抱えると、そろって踵を返した。

「谷内さんのこと、頼んだよ。浩介君」

「はい。折笠さん！」

手を振りながらの雄一郎の言葉に、随分とはつきりした声が返ってきた。

さっきの心配はやはり無用なものだったようだ。

「で、なんであたしがこんな運ばれ方しなくちゃいけないわけ？」

「ここはさっさといなくなつて、二人の様子を観察する場所を探さなけりゃいけないんでな。早急に事態を進めるための手だ」

間違つてもさっきのチョップの報復を恐れてのことでは無い。

雄一郎はノリで行動したのだろうが。

そこは長い付き合いだ。流石といえる。

「悪かったわね！どーせあたしは何だつてケチつける捻くれ者ですよ！」

「自覚してるじゃないか」

「うるさいっ！」

予想通り飛んできた拳を避けようと、体を反らせた途端、腹部に強烈な襲撃が走った。

「料理より先に、女心を勉強したほうがよさそうですね」

拳をフェイントにした蹴りを喰らい、地面に倒れた俺を雄一郎が苦笑しながら見下ろしていた。

第八話：隠密工作班

午後7時。

そろそろ部長達は合流して、覗き見体勢に入ってる頃かな。

いいなー。あたしもストーリーカーしたい。

ま、こっちはこっちで楽しそうだからいいんだね。

「どう？マリ。いけそう？」

「ふふふ。誰に言っているのだ。この程度、私にとっては兎戯同然よ！ルーターはむき出しの上にハブさえあれば簡単に割り込める！その上ユーザー名もパスも必要な情報は全て抑えておるのだ。障害など無いわっ！」

「うん。わかったからもうちょい静かにね。部長と違って私達に助っ人はいないから」

背負ったリュックを叩きながら、口角を吊り上げながら不敵に微笑むマリ。

こうなるとこっちの声なんて聞こえてるんだかわかったもんじゃない。

やれやれ。巻き添え喰らって捕まる前に、逃げる準備はしとこーっと。

部長がしておいたように、窓に取り付けられた防犯装置の間にカーテンを仕込んでカモフラージュ。

命綱は多い方がいいからね。

現在私達がいるのは谷内邸京花ちゃんの部屋。

部長からの連絡で、三人が谷内邸を去ったのと、ほぼ入れ違いで到着した私達は彼女の母親が一人になったことで作動させたらしい防犯装置を掻い潜るために、例の侵入ルートから彼女の部屋へと侵入していた。

目的はこの家主。谷内たにうち 京太郎きょうたろうの自室にあるパソコンの中身。
本来なら家の人間が京花ちゃんだけになる明日にちょちよいとやる

つもりだったんだけど、部長が何故か予定を早めたせいで、家に人が居る中侵入するなんてリスクを犯さなきゃいけなくなった。

「まったく。人使い荒いよねー」

「だが、カメラや防犯装置をかくぐれるのはこの子の部屋からだけなのだ。ほとんど部屋から出ない今回の彼女が部屋を離れた今を逃すわけにもいくまい。なに、気取られる前に終わらせればいいことよ。行くぞ」

狂気じみた笑顔のまま、マリは部屋のドアを静かに開けた。

彼女は筑紫場 真理^{まり}。報道部の3年だけど、年齢は私達と同じ。所謂飛び級^{つくしほ}つてのをやってのける天才。

まあ、確かに機械に関する知識は相当なものだし、彼女が実際作った発明には天才たる証拠となってる物も多いんだけど……。その為に惜しまないのは努力や時間だけでなく、一般人や公共物。法律までもを時には無視して突っ走って行っちゃうところがある。

普段は研究に没頭してるからそうそう問題も起きないんだけど、暴走^{ばう}ししたら間違いなく私を超えるトラブルメーカーなのだ。

最近は特に惹かれるものが無いって部屋で文句言ってたから大丈夫みたいだけど。

「そうだね。母親は多分リビングに居るだろうから、気づかれないようにね？」

「入り口を通過するだけであろう？問題ない」

その言葉通り、まだ夕食の洗い物をしていた母親がこっちに気づくことは無く。難なく素通りできた。

後は廊下を曲がって、パソコンのある書斎まで一直線だ。

けど、そこでリビングのマグカップが目に残った。

「マリ。ちょっと待って」

「ぬっ？」

マリに静止をかけて中の様子を伺う。

母親はまだ洗い物の最中で、こっちは背を向けている。

そして、母親と私との丁度真ん中あたりの机に、湯気の立つマグカ

ツプが置かれていた。

多分、洗い物の後にでも一息つくためだろう。

「いいもの見つけちゃったよ」

「何をする気だ？」

同じように覗き込もうとするマリに、ポケットから一本のスティックシュガーの袋を見せる。

「退路の確保だよ」

「・・・とんでもなく悪い笑顔になつとるぞ？」

私の顔を見るなり、マリはそう言つて苦笑した。

「さつきあれだけの笑顔を見せた人に言われたくないよ」

むっとしてマリを睨んでから、もう一度リビングの様子を伺い、すばやくマグカップへ近づく。

スティックシュガーの中身を全て入れると、静かに廊下へ戻った。

「さ、行こつか」

「何をいれたのだ？」

「んふふ。後でわかるよ」

どうしてこういう事をしたときはこんなに気分がいいんだろう。

自分でも不思議に思いながらも、やめられないからしょうがない。

書斎の前までたどり着き、分厚そうな大きめのドアを音を立てないようにそつと開ける。

ガチャ

「しかし、ドアは開かなかった」

「RPG風に解説してないで、鍵は？」

「無論用意してある。序盤に手に入るようなコソドロの物とは訳が違う。全ての鍵穴を制覇した魔法の鍵をな！」

小声ながらも胸を張って白衣のポケットをまさぐるマリ。

うーん。それが無敵だったのはもう過去の話なんだけど。

やがてマリが取り出したのは黒い棒の先端に折り曲がった針金が数本飛び出したような物。

その針金部分を鍵穴に突っ込み、更に押し込むと、ガチャリと音が

して簡単に鍵が開いた。

「どこで用意したの？そんな物」

「あるピッキング道具を参考に私が改良したものだ。一般的な構造の鍵なら大抵これで事足りる」

「全ての鍵穴を制覇したんじゃないの？」

「（予定）を付け忘れたな。ま、開いたのだから問題あるまい」

「そだね。じゃ、本番といこつか」

「うむ」

ポケットから手袋とニット帽を取り出し装着。

マリも同じ様に手袋をはめ、肩より少し伸びた髪をニットの中へ閉まった。

お互いに無音で頷きあって、静かにドアノブを回す。

今度こそ開いたドアから中へ侵入。

再び物音を立てないようドアを閉めている間に、マリは机の上に置かれたパソコンを起動していた。

「母親の洗い物が終わってマグカップに口を付けるまでが制限時間」
「了解」

書斎の中は思ったよりは綺麗だった。

事前に聞いた話では足の踏み場もないほど書類やら衣類が散乱している筈だったけど、書類は数枚重なって放置してあるだけで、衣類等は見当たらない。

「整頓されるとはいいい難いかな」

部屋を見回すあたしに気づいたのか、マリはリュックから自分のノートパソコンや青いケーブルを取り出しながら戸棚を指した。

少し移動すると、外の明かりで見えなかった中身が見えてきた。

戸棚のはずなのにガラスの向こうに棚は見えず、うずたかくしわくちゃのスーツやワイシャツが鎮座している。

確かにお世辞にも整頓されてるとはいいい難い。

あたしはその戸棚に手を掛けると、迷うことなく中を物色しだした。
「何をしている！？余計なものには・・・！」

「事前の調査じゃターゲットの書斎は汚かった。別に綺麗好きって話も聞いてない。なのに見かけだけとはいえ綺麗なのはおかしいよ。綺麗なのには理由がある。例えば……」

戸棚を荒らし終わると、次は机の引き出し。本棚の下についてる引き戸など、見えずらい場所を次々と荒らす。

そして見つけた。ターゲットが綺麗に見せた理由。

「みつつけた」

「成程。流石よ。こつちも仕込みは完了。例のモノも見つけた。転送が終了次第片付けて撤収だ。ケーブルの回収を頼む」

「了解」

手を額にびしつと当てて敬礼する。それと同時にパタパタと足音が聞こえてきた。

「ぬ！？今来たか。不味いな」

「いや、だいじょぶだいじょぶ」

素早くケーブルを手繰り寄せ、机の陰に隠れようとしたマリに手をひらひら振りながら答える。

案の定足音は書斎の前を通り過ぎ、しばらくしてからドアの閉まる音が小さく聞こえた。

「タイムリミットみたいだね。急いで撤収しよ」

「な、何故こちらに来てないとわかったのだ？」

転送は終わったらしく、ノートパソコンやケーブルをリュックに乱暴に詰め込みながらマリがこつちを向いた。あたしも近くにあったケーブルを巻き取りながら、再びスティックシュガーの袋を取り出してみせる。

「桜井葦名特製超強力下剤。通称『爆裂二号』」
だめだ。名前言っただけで顔がにやけちゃった。

マリはそれで理解したみたいだけど、溜息を付いて肩をすくめた。

「……葦名よ。いつもそんなものを持ち歩いとるのか？」

「人生にはこれくらいスパイスは不可欠だよ」

笑顔でそう返すと。マリは「せめて自分に使って楽しめ」と、もう

一度溜息を付いた。

本当はマリも人のこと言えないんだけどねー。むしろ自覚して無い分君の方が厄介だよ？うん。

あたしは自覚した上で人に迷惑かけるだけだもの。

「んじゃ、母親がトイレにこもってる間に脱出だよ。ま、一時間は余裕なはずだから、落ち着いていこう」

「そんなものを罪の無い人間に……」

「マリに言われたくないなあ」

またしても溜息を付こうとしたマリに笑顔で反撃。

本人にも思うところはあったみたいでむっと押し黙った。

そこで、視界の隅に何かが映った。

「コルクボード？これスケジュール表じゃん」

部屋の整頓もしないずばらでもスケジュールはきちんと管理してるらしい。

終わろうとしている7月の予定と、8月の予定がかなり細かく書いてあった。

「びっしり埋まってるな」

「そだねー」

なんて言いながら、何気なく壁にかけてあったそれを裏返す。

と、そこにもまたスケジュール表が張ってあった。

「ぬ？先月の分か？」

「……いや、違うよ。これも7月。それに……」

あ、何かまずい物発見した。

「これは……」

「なんと……」

思わず顔が引きつった。

マリも同じ物を見つけたらしい。

あたし達がこんな所に忍び込んでまで集めた物。

それらを一気に引き立ててくれる、ある特定の人物との予定だけが書かれたスケジュール表。

本来なら大喜びで写真にでも取っておきたいところだけど、そこに書かれた今日の予定。

『白木大通り。駅前8時』

そこには、今正にうちの部員達が居るであろう場所が書かれていた。

第九話：折笠雄一郎の心情（前書き）

ちよつと旅行に行つてまして、更新に随分間を空けてしまいました。
楽しかったです。
すいません。

第九話：折笠雄一郎の心情

午後7時半。

恋愛というのは人それぞれで形が異なる。

その始まりも十人十色。ある日突然の一目惚れや、気づかぬうちに縮まった距離がいつしか恋愛という形に昇華されたり。

だから、別にこういう無理矢理第三者が赤い糸を引っ張ってきた恋愛があってもいいと思う。

強引に結びつけた分、しっかりサポートさえすれば。

と、というのが俺の考え。

けど、やっぱり誰でもそう柔軟に考えられる訳じゃないのも事実。

俺の後ろで部長の襟首を掴んで放さない子みたいに。

「いい加減に洗いざらい説明したらどうなのよっ！いちいち情報小出しにして！これがどう京花の助けになるのよ！そもそも理由作りが何でデートじゃなきゃいけないのよっ！！！」

「話させるつもりがあるなら、まず俺を放せ！振りまわすのをやめろっ！」

「二人とも仲がいいのは結構だけど、これじゃ隠れて監視する意味がないんだけどな？」

「これのどこが仲がいいように見えるのよっ！」

うん。火に油を注ぐだけだ。

ここは部長に任せて、二人を見失わないように専念しよう。

俺達が居るのは白木駅の二階通路。ガラス張りになっていて目の前の白木通りが見通せるようになってる。

そして、その正面から少し右に視線をやると、手を模したモニュメントを囲む小さな公園が見えた。

俺達が二人と別れた公園。

二人はまだそこに居た。

「……………ふう。彼は、島野浩介は一種の引きこもりだな。」

去年入学し、その一月後から学園に来ていなかった。それを引きずり出そうと画策し、ようやく外でバイトを始めるようになったのが冬休みが終わる頃」

俺が彼女達を見つけると、ようやく開放された部長が説明を始めた。手すりにもたれ掛かってメガネを直す仕草を見ると、随分と疲労しているのがわかる。

それでも、そこまで機嫌を損ねていない様子を見ると、中々部長も遅しい。

「バイトを始める直前からは折笠が彼の家に通いながら相談に乗る程度で済む段階に来ていた。だから、そろそろ復学できると踏んでいる」

と、そこでちらりとマキちゃんに視線を送ると、かなりのじと目で睨まれている。

だから何なのよ！と視線で訴えているのだ。手が出てないのは「もったいぶれば出す」という警告にも思える。

それでも部長は、腕を組み呆れたように溜息を付きながらマキちゃんを睨みかえした。

「気づかんか？島野浩介の経緯は谷内京花の現状と似ているのだ」マキちゃんの表情が変化した。

部長が睨みかえしたのは、いや、睨み返したというよりも、正確には相手の目を見つめることで、自分の話を聞かせる体勢を作ったのだ。

目を見つめられると、目をそらしづらくなる。

その瞬間に言葉を紡ぐことで、相手の意識は自然とその言葉に集中する。

現にマキちゃんはさっきまでの苛立ちを忘れたかのように、部長の言葉から思考を巡らせている。

相変わず話術の上手い人だ。

俺がやっても、ああもうまくはできない。

「……………似てるって言っても、入学してからすぐ来なくなっ

たつて事だけでしょ？京花はまだ引きこもりつて訳じゃない」

そう返してきたマキちゃんの表情は、真剣だけど睨んではない。それにあわせて、部長の表情も少し穏やかになった。

「今の説明ではな。だが、島野浩介が引きこもった原因、当時の人間関係、趣味、生活習慣。そういった細かいデータも報道部には記録されているし、谷内京花のものもまた然り。そして、過去のそういったケースの問題のデータとも比較しての意見だ。それに……」

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！そんな犯罪じみた量の個人情報集めて、一体報道部で何する気なわけ！？」

マキちゃんが慌てるのもわかる。確かに報道部には部員達がそれぞれ集め管理している個人情報、それこそ犯罪レベルの量存在している。

しかし、部長は落ち着いて。むしろ、不敵に笑って答えた。胸を張り、堂々と。

「無論。真実を報道するのだ」

報道部は真実を報道するためにある。

去年卒業した元部長が言っていた台詞だ。

それを言う時は、決まって同じように堂々と、まるでその場の全ての人間に宣言するかのように言っていた。

部長も同じ事思い出したんだろう。少し懐かしい気分になった。

「でだ。二人の似ている点で最も重要なのは、……ん？」

自信に溢れた態度と裏腹に、出てきた突拍子のない理由に、マキちゃんは呆気に取られていた。

そのまま強引に話を続けようとした部長から、話の腰を折るように振動音が響く。

「新史だ。どうした？……何？白木通りのどこだ！？おいっ！聞こえんぞ輩名！」

どうも桜井からの電話らしいが、いい知らせではないらしい。

彼女達の別行動の内容を考えると、嫌な汗が頬を伝った。

電話は勝手に切れてしまったらしく、黙って携帯を見つめる部長の表情には焦りと動揺が見て取れる。

「な、どうしたの？」

部長の言葉を待っているつもりだったが、先にマキちゃんが歩み寄っていった。

部長は答えずに口元に手をやり数秒何かを考える素振りを見せると、俺の方を向いた。

「葦名達は成功のようだが、妙なチンピラ集団に追いかけてると報告してきた。取り合えずこっちのメンバーを裂いても間に合わんだろうから龍野に連絡を取って任せるように思う」

「わかりました。で、それだけじゃないですよね？」

確かに危険な状態といえなくもないが、その程度で部長が取り乱すとも思えない。

予想通り。部長は真剣な表情で頷くと、ガラスの向こうへ視線をやった。

「この白木通りのどこかに、女連れの谷内京太郎がいる」

「え、っ……」

「は？」

思わず表情が引きつった。

マキちゃんは聞きなれない名前に一瞬不可解な表情をしたが、すぐに合点がいったらしく、複雑な表情をした。

「そつれって……、つまり……」

「不倫だ」

恐る恐る確認しようとした言葉に重なるように、部長の答えが返ってくる。

聞いた途端マキちゃんは「やっぱりか……」と肩を落とし、部長も深い溜息を吐いた。

「急いだ方がいいですね」

俺は一人まじめな表情で公園の二人を確認しながら部長に促す。

呆れたいのは俺も同じだけど、事は一刻を争う。

「そうだな。そんなくだらんことで計画を潰されるなど我慢ならん。監視および必要最小限のサポートは一時中断。ターゲットとその父親の接触を全力で回避する。行くぞ！」

気を取り直しそう言い放つと、部長はダッシュで階段を降りていった。マキちゃんも溜息を吐きながらそれに続く。

俺はもう一度二人のいる公園を確認し、後に続いた。

二人は丁度待っていたかのように座っていたベンチから腰を上げていた。

駅を出てすぐのところに部長とマキちゃんは立ち止まっていた。追いつくと、部長は白木通りの案内板を見上げながら、携帯に話しかける最中だった。

恐らく、島野浩介のカウンセリングを担当した俺に、彼らの行きそうな場所を特定させようということだろう。

正直な話。俺には目的地どころか、そのルートや起こるイベント。その全てがおおよそ把握出来ている。

彼に女性とデートをする時の会話をする中で、何回かこの白木通りでのことも話した経験があるのだ。

初恋はとうに過ぎ去ったようだし、実際に女性とデートをするなど彼には初めて。

となれば、彼が出来るエスコートなど俺の話した内容ぐらいしか無いはずだ。

ましてや彼は外に出ることなどほとんどない生活を続けていた分、応用を利かすなどという行為にも手が届くとは思えない。俺のデートコースをそのままなぞるくらいが今の彼に出来る精一杯だろう。

「龍野への連絡は完了だ。雄一郎。どこだ？」

「コンビニで適当な食べ物を用意してまずはゲームセンターオロチ。その後にカラオケ。居酒屋の順で通りを大きくジグザグに」

「わかった。行くぞ。まずオロチだ」

「へ？え、わかった」

部長と俺にとっては十分な会話でも、マキちゃんには理解が追いつ

かなかつたらしく、半ば流されるようにオロチへと移動した。通りの反対側のコンビニからは、丁度二人が出てきたところだった。

「俺とマキで中を探る。その間外を頼んだ」

「了解」

30そこらの男がゲームセンターに女連れで来るのだろうか？とは思うが、万全を期すに限る。

「あたし京花の親父の顔なんて知らないわよ？」

「30そこそこの男が女連れで歩いてたら呼べ。面倒なら一発ぶん殴ってトイレにでもぶち込んでおいてもいい」

「了解」

後ろから物騒な話題が聞こえたけれど、聞こえなかったことにして外へ出て目を凝らす。

二人がこっちへ向かって来る。

それを飲み込むであろう人の波の上流。

二人に見つかって空気を壊してしまってもまずいので、それとなく隠れながら谷内京太郎を探す。

時刻はそろそろ8時になる。

街頭や看板が白木通りを照らし、人の人種も昼から夜へと変わっていく。

男と女の二人連れはそこに居るが、谷内京太郎の姿はなかった。

二人がこちらへ後十メートルほどとなり、中の二人が遅いなど連絡を取ろうとした瞬間、叫び声と怒号が中から聞こえてきた。

そして、自動ドアから部長とマキちゃんが飛び出してきた。

「待てやこんガキいいいい！！！」

そして後を追って出てきたのは柄物のシャツを着た。頬に傷のあるあからさまなおじさん。

「何でお前はあんないかにもなおっさんに喧嘩なんぞ売るんだ！」

「30そこそこの女連れは取り合えず殴って言って言ったのそつちじゃない！」

「だからって頬に傷のある人間を平気で殴り飛ばすなあああ！」

叫びながら走っていく二人を追いながら、ようやく事態を理解した。
「それどころじゃないでしょう。二人とも」

部長もマキちゃんにかかることも変わるもんか……。ちよつと失望しつつ、胸ポケットからサングラスを取り出す。

こういう事態の収拾なら俺の出番だ。

これ以上二人を放置して接触されても困るし、このままだと無駄に目立ちすぎる。

そう判断し、髪を後ろへねかせると、俺は部長達とおじさんの間に割って入った。

「何じゃお前は！？そこをどかんかい！」

怒鳴りつけて凄んでくる相手に、俺は仮面を切り替えていた。

両手をポケットに突っ込んだまま、ゆっくりとサングラス越しに相手を睨みつける。

「お前こそこのどいつだ？うちの御嬢に随分舐めた真似してくれ
とるようじゃねえか？」

自然と声が低くなり、肩を大きく揺らしながらゆっくりと相手に近づく。

無論、目は絶対に離さずに。

「なんじゃ我え！テメエもどこぞの者かい！？」

怒りが退く様子が一切無い。

睨み合いで退かないのなら、仮面を僅かに調整する。

「俺らはなあ。うちの御嬢の為なら命張れる奴らよ。オメエが御嬢
に何かするってんなら、俺あ腹裂かれたってテメエを潰して御嬢守
んだよ！」

徐々に声量を上げながら感情を強めていく。

目線だけは一切緩めることなく相手の出方を待った。

やがて、相手の表情から力が抜け、短く溜め息を吐いた。

「……。止めましようや。ここで俺らが抗争始めちまっても、
お互い困るだけでしょう。俺もんな大層な御嬢さんの鉄砲玉に成る
気なんてねえ。知らんかったことだ、何もせんで手打ちにしましょ

うや」

かった。

さっきまでとは別人としか思えない相手の落ち着きよう。しかし、表情から緊張が取れてないあたり、少し焦りが出てきたのだろう。これなら解放した途端どこかに行つて来れるだろうし、ここらで終わらせてもらうか。

「おい御嬢！」

「はい！……あ、あたしですか？」

「あたりめえだろ早く来いっ！」

後ろにいるはずのマキちゃんを大声で呼ぶと、思ったよりも近くで慌てた声が返ってきた。

隣に現れた彼女の頭をいきなり鷲掴みすると、慌てる本人を無視して頭を下げさせた。

「ああは言つたが、元はと言えばわりいのは此方だ。手打ちにしてもらえるならそれにこしたことはねえ。御嬢もこの通り反省してる。どうにか許しちゃくれねえか？」

駄目押しとばかりに俺も頭を下げると、おじさんは「いい兄貴を持つたなあ。お嬢さん」と言つて、背を向けて去つて行つた。

見えなくなつたのを確認して、サングラスを外す。

はあ、っと深い溜め息を吐くと、マキちゃんもゆっくり頭を上げ、周囲を確認している。

「もう行つた。ご苦労だつたな。雄一郎」

その頭をくしゃつと撫でて、部長が顔を出した。

「俺の仕事ですからね。これは。できればなくて済むようにして欲しい仕事ですけど」

「こいつは俺でも掴みきれんだ」

少し嫌味をこめて返すと、部長は小声で呟いた。

やれやれ、この分だと掴みきれても扱いきれそうにもないな。

「あ、あの……。折笠先輩？」

そこへ、後ろからおずおずとマキちゃんが顔を出した。

不思議に思ったが、彼女の前で仮面を使ったのは今が始めて、それを思い出し言葉に詰まった。

流石に初見があれなのは不味かったかな・・・。

「えつとね・・・。。あれは・・・」

「あれは雄一郎の『仮面』だ。別に多重人格でもないし、性格が豹変したわけでもない」

どう説明したものかと悩んでいると、部長は当然のように説明を始めた。

「演技ってこと？」

「一言で言えばそうだな。相手の趣味趣向に合わせて会話を引き出したり、人脈を増やすのにも使える上、今の様な例外的な使用方法もある。他人の僅かな反応から相性を測り、仮面を調節できるこいつにしかできない特技のようなものだ」

「へえー・・・」

部長の説明に、マキちゃんは素直に納得した。

完全に理解した様子でもなかったけれど、やはり彼女に関しては部長は扱えきれないと言った方が正しいみたいだ。

「・・・何だ？雄一郎」

「なんでもないですよ」

俺の視線に気づいた部長をわざとはぐらかす。

ま、こういうことは本人が気づくべきでしょう。難しいかもしれないけど。

と、穏やかな気持ちになってしまっただが、ふと思い出した。

「あ」

「だからな・・・、ん、だ？」

部長も気づいたらしい。俺たちが向かい合って固まっていると、マキちゃんがそれを叫んだ。

「あ、あの二人何処行っただ？」

不味い。不味すぎる。

すっかり忘れかけてた！

「散らばって探すぞ！捕提次第連絡を回せ！」

「待つて！・・・捕提って何だっけ？」

急いでオロチへ向かおうとした部長をマキちゃんが制する。

「何だ！」と振り向いた部長は次の言葉ですっこけていた。

「お前はいくつだ！！！」

「何となくはわかってるのよ！ただ・・・いざやるとなると、どうだったかなー？ってばやける所が・・・」

「見つけたら知らせると言うことだ！」

「そ、それならそうと最初っから言いなさいよ！」

「そんなことを言ってる場合か！！！」

駄目だ。俺だけでも探そう。

言い争う二人を置いて、俺はさっき部長に感じた評価を早速取り消した。

第十話：谷内京花の不安

そろそろ午後8時。

新史さんは私を手伝ってくれると約束した。

初めて……、では無いけれど。ほとんど会ったことも無いはずの彼の言葉を私は疑うこともしなかった。

何故かはわからない。

ただ馬鹿なだけなのかもしれない。

けれど、きつと後悔はしない。

そんな気がした。

「さっきの……、新史さん達だったよね？」

「……多分」

ゲームセンターへ入ろうとした私達の前に、突然飛び出してきた三人はどう見てもさっき分かれたはずの二人だった。

あきらかに危なそうなおじさんに追われてるのを見て、どうしていいのかオロオロしていた私を、彼は腕を引っ張って通りの反対へ連れてきていた。

マキちゃん達からまるで逃げるようにビルへ入り、階段を上がると、そこは居酒屋だった。

と言っても、人はそれほど居なくて、なんだか落ち着ける雰囲気が漂っている。

「あの人たちなら、……多分放っておいても大丈夫だね」

「そ、そうですか？」

「……うん。そのはず」

会話をしても、彼はこっちを見ようとし無い。

落ち着き無く店内を見回しながら、空いてる席を見つけると、またも彼は強引に席まで私を引っ張ってきた。

「あの。放して下さい！」

「え？あつ……」

席に着く間際に、そう言つて手を引つ込めた。

意外とあっさりと外された手を抱え、初めてこっちを見た彼を睨んだ。

折笠先輩ほどでもないけれど、割とかっこいい。

けれど、あまり好きになれる人ではなさそうだった。

公園で二人つきりにされた後も、軽く自己紹介をしてベンチに座ったつきり。

しばらくお互い何も話すことなく、唐突に彼が「お腹減らない？」

と言ったから、コンビニへ、

そのままオロチへと誘われたので、向かった。

それだけ。

終始私の顔をまともに見ることも無く。

何かお互いの話をするでも無く。

『しょうがないから付き合つてやつてる』

口に出さないだけで、そう言われている気がしてならなかった。

しょうがない。確かにこの人に付き合つてるフリをしてもらうのは私の都合だから。

元々この人は私のことなんか知りもしない人なんだから。

私なんか、相手にしたいわけじゃないんだから。

「そっか……。ごめん。手、嫌だった？」

私が何も言わずにいると、彼ははつとして顔を伏せ、何とか聞こえる程度の声でそう言った。

その仕草が、なんだか引つかかった。

緊張……。してる？

新史さんのことだから、きっと恋愛なんかしたことの無い私でもどうにかしてくれる、恋愛のプロみたいな人を呼んだんだと思ってた。そんな人だから、私に目も向けてくれないんだと。

でも、今のは。

「取り合えず、座らない？俺もちょっとテンパちゃっててさ。教えられたこと全部、すっ飛んでた。今からじゃ、駄目かな？」

「え．．．？」

促されるままに向かいの席に座ったけれど、苦笑して彼が言ってきた台詞の意味は、全然わからなかった。教えられたって、何だろう。駄目って、何が？

私がただ呆けていると、彼は頬を掻きなが表情を引きつらせた。

「な、何か．．．、変なこと言ったかな？」

「あ、いえ．．．．．」

「ご注文はお決まりですか？」

私が答えに戸惑っていると、店員が水を運んできた。ついでに注文も取るつもりらしい。

「あ、はい。えーと。うわっ！」

と、慌ててメニューにてを伸ばした彼は、水の入ったコップを倒してしまった。

「何か拭くものをお持ちしますね！」

「あ、はい。お願いします！ごめんね！かからなかつ．．．。ああっ！」

「あ、大丈夫．．．で、わあっ！」

自分のハンカチで急いで拭こうとした彼は焦り過ぎたのか私のコップまで倒してしまった。

さっきのはテーブルに広がっただけだけど、今度は私の服にまともにかかった。

それどころか。

「あっ？」

「うわっ！」

「えええっ！？」

醤油。ソース。仕舞いには爪楊枝までもテーブルにばら撒いて、見たこともない惨状を作り上げていた。

「．．．．．わざとですか？」

「い、いや！いやいやっ！違っっ！」

私がじと目で睨むと、彼は手と首をこれでもかと言うほど振って否

定した。

はあ。

何だろう。

服が濡れたこととか、さっき言われたこととか。

真剣に考えて混乱してた自分が馬鹿みたいに思えて、思わず溜息を吐いた。

「あ……………」

それに反応したのか、彼は動きを止めて、こっちを向いたまま視線をそらせた。

その様子をただ見ていると、彼は私の視線に気づいて思い切ったように口を開いた。

「そつ、そんな顔も、かわいいよっ!」

「へ?」

さっきまでとは違い、視線は泳ぐことなく私だけを見て。

つかかってしまったけれど、はつきりと聞こえるように。

でも、作らなかった笑顔は口元が引きつってしまっていて。

勢い余ってテーブルに付いた手は醤油とソースまみれで。

何よりこんな状況で、そんなに一生懸命な表情で。そんな台詞を不意に言ったものだから。

「…………ぷ…………ふふふ。あはははははははは!」

私は思わず吹き出してしまった。

しかも、止めることが出来ずにそのまま大笑いしてしまった。

「え…………。えつと…………?」

彼は何がなんだかわからないようで、固まったまま首を傾げた。

私はひとしきり笑うと、何とか息を整えながら彼を見た。

「ふふふつ。この状況で、何でそんな台詞が出てくるんですか?」

「え?え、いや。女の子がつまらなそうだったときは意外な一言で驚かせてあげるのもいいって教わったもんで…………」

私が笑顔で見つめると、彼も視線をそらさずに返してくれた。

頬を掻こうとして、手が醤油とソースまみれなのに気づき、またお

るおろしでしたから、私のハンカチを差し出した。

「使っていいよ」

「え？でも、汚しちゃ悪いし・・・」

「彼氏なんでしょ？気にしないで」

「え？」

私の台詞が、彼は一瞬何のことだかわかってなかったようだから、私はその手にハンカチを押し付けて、続けた。

「私も忘れかけてたけど、嘘でも私達デート中なんだし。どーせなら楽しく行こうよ」

そんなことをどうしてこんなに笑顔で言えるのか、私にも分からなかった。

雰囲気にもまれたのかもしれない。

けれど、このどうしようもなく頼りない彼を、何故か私は、どうしようもなくかわいく思い始めていた。

第十話：谷内京花の不安（後書き）

更新速度も展開も相変わらずノロノロとお送りしています。

忙しいんです！バイトが！何故か今になって急激に！

と言うことで、更新速度はそうそう早くなりそうもありません。申し訳ない。

何故かこの話引っ張って十話まで来てしまった。

念入りにあれこれ考えたせいで余計なものの詰めまくってしまったようです。

ご意見、ご感想、クレーム、指摘等ありましたらお待ちしております。ぜひ参考にしたいです。

第十一話：覗き人達（前書き）

忙しい中風邪までひいたおかげで、いつの間にやら一か月も空けてしまいました。

第十一話：覗き人達

午後8時15分。

散々走り回ったつてのに随分近くに居たんじゃない。

白木駅を二周回った時にやっとメールに気づいたせいで、あたしは薄ら汗を掻きながらもようやく新史たちと合流した。

店内に入ったあたしを二人は人差し指を口に当てながら手招きした。
「随分遅かったな？二人ならこの真後ろの席だ。気づかれないよう声は抑えろ」

新史が親指を自分の後ろに向けてそう囁いた。背伸びして向こう側を除くと、確かにさっき見た顔が居る。

しかしまあ、随分仲良く会話してるじゃない。

流石は折笠先輩が連れてきただけの事はある。やるときややるのね。

「羨ましいのはわかるが、覗きすぎてばれるなよ？」

性懲りもなく、いらぬ一言を付けてくる新史を思いっきり睨み、どかっとな腰を下ろす。

それを待っていたかのように、新史は小声で話し出した。

「まあ、その様子を見る限り大体の予想は付く。走り回ってて気づくのが遅れたつてところだろう。こっちは雄一郎と一緒にすぐに二人を見つけ監視を続けていたが、なかなかいい雰囲気だろう？」

「その名探偵じみた推理は対したもんだけど、苦労してるのがわかつてるなら劳いの言葉の一つもあつていいんじゃない？」

「む？それもそうだな。ご苦労だった。何度か家まで行つては眺めるだけで帰ってきたり。彼女の父親のデパートにやたら通つて万引き犯や態度の悪い客を掃討するほど心配していた友人のためとなれば、お前のことだ。周囲が見えなくなるくらいは許容範囲か。もつとも、後者は店員に出入り禁止を警告されたそうだがな」

「なっ！？なんでそんなことまで知つてんのよ！」

「何を今更……。報道部だからだ」

無茶苦茶な理由の癖に、呆れたように腕を組み溜息を吐く。

その仕草がムカついてしょうがない！

「まあまあ、落ち着いてマキちゃん！後ろに二人がいるって事を忘れないで！」

怒りに両手をわなわなと震えさせていたあたしを折笠先輩がなだめる。

その言葉に一瞬怒りを忘れ衝立の向こうにいる見えない二人に視線をやる。

確かに、これが成功すれば京花はまた学園に戻ってくるかもしれない。……けれど、本当にこれでいいのだろうか。新史や折笠先輩達、報道部の面子がかなり調べ上げたうえで計画したことだし、その後のフォローも約束してる。

けど、京花は嘘を付くことになる。

好きでもない恋人と付き合ってるフリ。

それだけで何事もなかったように学園に戻れるのだったら、彼女にはそれぐらい平気なのだろうか。

少なくとも、あたしが知り合ったときの彼女の印象だと、そんなことを長く続けられるようには思えなかった。

「マキちゃん？どうかした？」

「え？あつ、いや。なんでもないですよ。ちゃんと学園に戻ってきたらいいなと思っただけで……」

「心配要らないよ。この様子だと二人ともちゃんとやっていける。時間の問題だよ。きっと」

「そう……ですよね」

そう言うと、折笠先輩は爽やかに微笑んだ。
なんというイケメン。

その笑顔からは言葉通りの自信を感じる。それでも、あたしの中に残ったわだかまりは消えなかった。

だからか、私は頷くだけで、先輩から目をそらしてしまった。

「……そういえば、まだ話の途中だったな」

「・・・・・・何が？」

唐突に新史がそう言い、こっちへ視線を向けてきた。

自分からはぐらかせたくせに何言ってるかと思っただけで、どうも様子が違ったのでとりあえず首をひねった。

「今回の計画。お前はまだ納得していなかっただろう？ 駅では途中になってしまったが、別に隠すつもりは無い。ただ、余り人のいるところで話せるような内容でもなかったんでな」

「ああ、その話ね」

そう言えばそうだった。

むしろどうしてそれを忘れていたんだろう。

多分、あの二人があんなに楽しそうに話しているのを見たからだろうけど。

楽しそうに笑ってる京花を見て「これでいいだな」ってなんとなく感じてしまった気がする。

だからか、あんなにむきになっていたにもかかわらず、余り興味が沸いてこなかった。

「あの二人はな・・・」

「もう、どうでもいいわよ。あの子がこれで戻ってく・・・」

「聞け」

被せるように手を振って止めようとしたら、更に被せてきた。

「何をそんなに聞かせたいのよ？ こっちはもういいって言ってるんでしょ？」

「馬鹿を言うな。お前のような奴でも理解しやすいようセリフを考え、何回か説明するシミュレートをし、その上暴力的なツツコミから身を守るための動きまで考えたのに全部無駄になどできるか！」

「んなもん知るか！ ていうかそんなどうでもいい理由すら真顔で言うの止めなさいよ！ 冗談に聞こえないじゃない！」

「当然だ！ 冗談ではない」

「実際、マキちゃんが来るまでずっとツツコミをかわす練習してたからね。目立たないように」

「説明無駄になる前提の動きじゃないそれ！って、折笠先輩のつかってどうするんですか！？こういうの止めるのが先輩のポジションでしょ！？」

「いや？どっちでもいけるよ」

「いけないで！お願いですから！」

な、なんなの？

こんなこんな空気だったっけ今？

何でいきなりボケ倒してんの、こいつらは！？

「あー、もう！わかったわよ。聞けばいいんですよっ！聞けば。そのかわり、説明するなら満足のいくまできっちり聞かせて貰うから覚悟しなさいよ！」

さつきとは違う意味でどうでもよくなったあたしは、テーブルをバシッと叩いて身を乗り出した。

それに新文はたじろぎもしないで、自分の横をぽんぽんと叩いた。

「なら来い」

「おお！大胆ですね部長。どんな心境の変化ですか？」

「新文……ふざけてるなら怒っていいのよね？」

「ち、違っつ！来ればわかる！ふざけてないから怒るな！拳を下げる！」

「……わかったわよ」

しぶしぶ立ち上がって折笠先輩と入れ替わるように移動する。

これで何がしたいのかと思いつながら、背もたれにもたれかかると、新文が何かを差し出してきた。

「使え。今いいところだ」

「何これ？」

「イヤホンだ」

「見りゃわかるわよ！これが何だって聞いているのよ！」

「後ろの会話が聞こえる」

「へ？」

半信半疑でとりあえずつけてみる。と、確かに聞き覚えのある声が

聞こえた。

「盗聴してたわけ!?」

「あの男が派手にテーブルをダメにしていたんで、とっさにこいつを仕掛けてその席に移動してもらったのだ。前もって用意していたわけじゃない」

「盗聴器自体は用意してたんじゃない。趣味悪いわよ。それに席の移動なんてそう簡単に店員に頼めるわけ……」

「御冷やお持ちしましたー」

「あ、どうも。えっと……」

冷めた目で新文を問い詰めようとしていたところに、女性の店員が水を持って現れた。

とっさに何か注文しなければいけないかと思ってメニューに手に取りうつとしたけれど、店員はあたしを見向きもしなかった。

「さっきの話ですけど、今週の土曜日シフト開けてもらったんですよ」さっそく二人で行きませんか？待ち合わせしたいからアドレスも教えて欲しいな」

「うん。いいよ。じゃあ、今週の土曜に。場所は白木駅でいいかな？」

「わー！ありがとうございます」楽しみにしてますね！」

あたしが呆気にとられている間に、店員は満面の笑みで下がっていった。

「まあ、そうやったわけだ」

新文は淡々とそう言っただけに反応もない。

ってことは、表に出ないだけで、折笠先輩。結構手広いな。それに早い。

やっぱ誰にでも本性ってのはあるのかな。

「仕方なくって奴だよ」

あたしの表情で悟ったのか、またしてもあのイケメン顔はそう言ったが、あの高校生ぐらいの店員の嬉しそうな顔が不憫でならない。

「その通りだ。それに、こいつなら後腐れの無い関係を作るのは慣

れている。悪いようにはせんさ」

なんでそんなもんに慣れてんのよ。

つと、ちよつと自慢げな新文にツツコンでやりたかったが、いい加減疲れてきた。

抵抗はあるけど、興味がないわけでもないし。

ごめんね。京花。

渡されたイヤホンを付けた。

さっきまでの笑い声とは違って、落ち着いた京花の声が聞こえた。

『私にはもう、死ぬしかないんだ』

・・・・・・はあっ！？

第十一話：覗き人達（後書き）

時期的に体調管理が難しい季節になりましたねー。

これからはまた週一。もしくははより早い更新を目指してまた頑張らせていただきます。

こんな作者ですがこれからも付き合っていけるといって根気強い読者さま方、どうぞよろしく。

第十二話：覗かれ人達

午後8時15分。

「なっ！？なんでそんなことまで知ってんのよ！」

後ろの席がまた賑やかになった。

やっぱりマキちゃんも来たんだ。

少し恥ずかしいような。

けど嬉しいような。

「向こうも皆そろったみたいだね」

「うん。ねえ、マキちゃんも浩介の家に着たりしたの？」

「ん？いや……。あの子は今日初めて会ったね。」

「そっか……。ちよつと不器用だけどかわいいでしょ？」

「えっ！？な……。え？……。ど、どうかな。俺はあんまああい

う人は苦手かも……。」

「マキちゃんはかわいいよ！浩介は見えないからわからないかもしれないけど、4年の先輩でも顔色一つ変えないでバシバシ倒しちゃ

うんだよ！冷静な表情のまま一人を踏み台にして背の高い一人に飛び膝蹴りを入れたところなんて見とれちゃうぐらい綺麗だし！」

「わ、わかった！わかったって！正確が苦手なだけで確かに綺麗だしかわいいよ！」

「彼女の前で他の女を褒めない！」

「で、でも君はもつとかわいい！」

「綺麗がない！」

「綺麗でかわいいです！」

「ちゃんと名前を言うって約束した！」

「京花ちゃんの方がかわいいし綺麗であります！」

「呼び捨てにしてもいいって確認もした！」

「はっ！京花の方がかわいいし綺麗であります大佐！」

「大佐って誰！？」

何故か勢いで敬礼までしちゃった彼はそのまま困惑した表情で固まっ
てしまった。

額から汗を流しながら猛烈に考え込んでいる彼を見ると、笑いが
押さえられなかった。

なんかすつごいかわいい！

「ふつ、ふふふ。あはははは！これじゃ恋人同士って言うより友達
ですよー！」

「え？あ、そう・・・だね。ははは」

私が笑い出したのを見て、彼はほっとしながらも苦笑した。

正直「綺麗」とか「かわいい」とか、言わせたいえ何か凄く嬉
しくてドキドキしてる。

思わずにやけちゃったのを誤魔化せたこともあって、私も心の中で
ほっとした。

「凄いね京花は。最初は何も言ってくれないし目もあわせてくれな
いから、正直どうしていいかわからなかったのに、もうこんなに話
せる」

笑顔のまま彼は呟いて顔を伏せた。

そんな風に言ってもらえたのは初めてだった。

だからか、思わず目を丸くして固まってしまった。

確かに今の私は普段じゃありえない事ばかりしてる。

こんな風になりたかった。

冗談とかを言いながら笑いあったり、ちょっとからかいあってみた
り。

今はからかってるだけだけど。

何でなんだろう。

怖くなかった。

「俺はさ・・・人と話すことも、会うだけでも怖くなつち
やって。だいぶ良くなっただけど、今でもまだちょっとだめなんだ。
すれ違った人の声が聞こえただけで自分のことじゃないかと脅えた
り、何か失敗したらパニックになったり。さっきも結構まずかった

し」

多分さっきのテーブルのことだと思う。

彼の声は小さかったけど、私にははっきり聞こえた。
聞き逃すなんて出来なかった。

「どうして……」

気づけば私は自然と口を開いていた。

「どうしてそうなったんですか？」

よくよく考えれば、そんなことを何も考えもしないで聞いちゃだめな気もした。

けど、私は聞かずにはいらなかった。

彼は一瞬だけ私の顔を見ると、少し視線をそらして続けた。

「この学園に入る前からね？俺人の輪に入るのって苦手だったんだ。既に仲がいいグループとかには絶対に入っていけなくてさ。この学園に入ったのをきっかけに治そうと思ったんだ。入学してすぐなら皆知らない人同士がほとんどだろうしね？けど……」

「そうじゃなかったんですね」

「うん……。高校からの知り合いとか、学園内で上がってきた子なんかはとくにグループが出来ちゃってたし。下宿や寮が同じ人たちなんかももう仲良くなっちゃってね。気づいたときにはまたいつも通り。どこにも入れないでさっさと帰るしかない俺がいた」

彼の顔が更に俯いた。

もしかしたらそのときのことを思い出して涙が出てしまったのかも
しれない。

私ですらそうなのだから。

「……え。ど、どうしたの!？」

私の様子に気づいて彼は慌てて顔を上げた。
溢れてしまった涙をぬぐいながら彼を見ると、やっぱりちょっと眼
が赤かった。

「自分のことが嫌いで……」

「え？」

「そんな自分のことが嫌いで、自信がなくなつて。人と比べるとつと嫌になつて。誰かに話しかけることも、会うことも出来なくなつて。．．．．．違いますか？」

涙は落ち着いた。

けど、胸が熱くなつておさまらない。

何かはわからないけど、感情のままにどんどん言葉が出てきた。

彼は何も言わなかったけれど、ほんの少しだけ頷いたように見えた。そうだったんだ。

だから彼なんだ。

新史さんが彼を選んだ理由が、わかった。

うつん。選ばれたのは私もなんだ。

「．．．．．同じなんです」

今度は私が俯いていた。

声も小さかった。

けど、きつと彼にはちゃんと聞こえてるんだと思う。

「高校に入ったら変わる。大学にいったら変わるって．．．．．

．。ずっと自分のことが嫌いだったから。けど出来なくて。そんな自分をもつと嫌になつて．．．」

いつの間にかまた涙が出ていた。

声も震えてる気がする。

声に出すたびにひどくなつていく。

それでも止まらなかった。

やつと、話せるから。

聞いてくれる人がいるから。

「壮学に入った時も．．．話しかけて嫌な顔されるのが怖くて、迷惑がられて噂されるのが怖くて、一人でさつさと帰ったんです。

これでまたいつもと同じになるんだ。また変われないんだって、けど、マキちゃんに会えて．．．」

4年の先輩だったのは後から知ったことだったけど、いきなり声を

かけられて囲まれた。

怖かったけれど、周りに声をかけて助けてもらうことさえ私には出来なかった。

ただ脅えてしゃがみ込んでたら、いつの間にか先輩達がいなくて、代わりに彼女がこつちを見下ろしてた。

「かつこいいね」

いつの間にか涙が止まってて、彼の声が耳に入った。

顔を上げると、彼は笑顔で話を聞いていた。

「・・・うん」

少し気分が落ち着いて、なんとか笑顔を返した。

「マキちゃんがいてくれたから私は少しでも学園に戻りたいって思えた。けど、その日をきっかけに私は他人が怖くなっちゃって、次の日から家を出られなくなってた。せめてマキちゃんとなら普通に話せるはずだからってお母さんに無理言って仮病で休ませてもらって」

「お母さん。わかってくれたんだ」

「・・・うん。結局今まで戻れなくてお母さんにも心配だけかけて、これ以上家に閉じこもってるのも限界だなんて思うと、もう・・・」

続く言葉が言い出せなくて、少ししんとした空気が流れた。

それでも、彼は黙って私の言葉を待ってくれていたから思い切って話した。

「私にはもう、死ぬしかないんだ・・・、って」

何度目かの涙がまたこみ上げてきた。

ずっと自分の中に沈んでた。

それこそ中学生よりも前から溜り続けていた不安、絶望。

それが、言葉と一緒に出て行く気がした。

「・・・やっぱりそういうことだったのか」

「え？」

彼の声に顔を上げると、彼は泣いていた。

思いつめた顔で、ただ静かに涙を流していた。

「何もかも全部って訳じゃない。けれど、俺達同じだったんだ。自分のことが嫌いで、人が怖くなって、でも誰にも話せなくて。新史さん達の目的はただの理由造り何かじゃなくて、俺たち二人でなら戻ってこれる。そういうことだったんだよ。きつと」

一言ごとに、彼の表情は変化していった。
少しずつ笑顔に、流れる涙は感謝に。

「うん。浩介の話を聞いたときに、私もなんとなくそんな気がしたんだ。だから私達が会わされたんだなって」

切なくて、悲しくて、そんな涙はもう引っ込んだけど、今度は私も感謝の涙が溢れそうになってきた。

「ありがとう・・・」

聞こえるとは思ってないけど、後ろの壁の向こうへ小さく呟いた。
今度学園であつたときに、改めて言おう。

そう決めて。

と、思ってたんだけど。

「ど・お・い・う・こ・と・よっ！！！」

後ろから突然聞こえたその声は店中に響き渡るほどで、誰もが一瞬静まり返った。

「お、落ち着けマキ！何を聴いたか知らんがこれじゃ台無しだろうがっ！」

「知るかつ！あの子にあんな台詞吐かせといてまだ訳わかんないままじゃ訳わかんないわよ！！！」

「うーん。マキちゃん。興奮しすぎて言葉と気持ちが混ざってるよ？ひとまず座って・・・」

「しゃらくさい！こうなつてまで黙って見てられるか！うるああっ！」

「お、お客さん！？ちょっと困りますよ！！！」

どがっつと、何かを蹴り飛ばしたような音がしたかと思うと、マキちゃんが後ろの席から飛び出してきた。

慌てて新史さんが出てきて戻そうとしたけど、伸ばした手をつかまれてそのまま組み倒されてしまった。

一瞬だったからどうやって地面に倒されて足で踏まれるまでなったのか良くわからなかったけど。

後から出てきた折笠先輩はやれやれと頬を掻きながら見守っていた。
「その優男！京花のさっきの台詞はどおいうことよ！きっちり説明してもらいましょうかっ！？」

突然のことにきよんとしてる私達にマキちゃんはビシッと指を突きつけると、そう叫んだ。

とはいっても、浩介には何のことだか全然わかってないみたいで、目を点にしてマキちゃんと私を交互に見るだけだった。

もちろん私にも全然意味はわからない。

「えっと、マキちゃん？何言ってるの？」

「京花！何言ってるのよ！さっき死ぬしかないって言ってたじゃない！そんなことあたしが認めないわよ！」

私に駆け寄って両手をしっかり掴んでそう言うマキちゃん。

その勢いに押されて思わず後ずさっちゃったけど、なんとなく事情はわかったかも。

「あ、あのね、マキちゃん。それはもういいの」

「よくないわよ！あいつに何言われたのか知らないけど！そんなの全然気にすることじゃ・・・」

「そうじゃなくてっ！あれは、なんていうか・・・。話にたまたま出てきただけで、むしろもう大丈夫だから言えたって言うか、言えたから大丈夫って言うか。マキちゃん達に感謝して今度はちゃんと言うと思ったらそれどころじゃない状況で会っちゃったなって思っで、けどこれはカウントしないよね？っていうか」

必死で説明したから自分でも何言ってるのか途中でわからなくなってきたけど、マキちゃんは私の手を握ったまま黙ってしまった。

「・・・大丈夫なの？」

しばらくしてそれだけ言ったマキちゃんに、私は頷いた。

「本当に？」

「う、うん」

「じゃあ、あたしが出てきたのは……」

握られた手がなんとなく湿っぽくなった。

それと同時に周囲の空気がちよつと冷たく。

いや、これは視線かな。

「ま、マキちゃん？」

「あ、あはは……」

笑つても誤魔化せないよ……。

「五月蠅いわねえっ！誰よっ！迷惑なのよ！」

握られた手がいよいよびっしょりになってきた時、奥の席から今度は甲高い声が響いた。

その当人はすぐに私達の席まで来ると、私にくっついてるマキちゃんの首を掴んで引き剥がした。

「あんたね！五月蠅いのよ！ガキの遊び場じゃないのよこわ！」

「い、いやあ。ちよつと勘違いだったみたいで……。ご、ごめんなさい」

「ごめんで済んだら警察はいらないのよ！せつかくの気分が台無しじゃない！慰謝料きつちり払ってもらうからね！」

「はあ！？慰謝料？居酒屋で気分も何もないじゃない。確かに悪いと思ったから謝ってんのに、付け上がってんじゃないわよ！」

「な、なんですってこのガキ……」

文句をつけてきた女性は凄い剣幕で怒鳴り散らしたけど、流石マキちゃん。

こんな状況でも食いついてしまった。

「ま、まあまあ。めぐみちゃん。こんな若い子相手にそんなに言っちゃ大人気ないよ」

「あ、京太郎さん、でもこのガキ失礼なんですよ？自分が騒いだくせにあたしにまで怒鳴り散らしてきてー」

鬼のような形相でにらみ合ってた二人だけど、奥からもう一人男の

人が出てくると、女性はこちらつと態度を変えてしまった。

それで少しは場が落ち着くかと思っただら・・・。

「お、お父さん・・・。」

「え、なっ！？き、京花！？何でこんなところに！」
最悪だ。

せっかく元に戻るって、学園に戻れると思ったのに。

ふと浩介をみた、きっと彼にも嫌な思いをさせてしまうんだ。

私のせいで、こんな場面に出会わせたりして。

もう最悪だ。

けど、彼も呆然と私でもお父さんでもないところを見つめていた。

「え、あれ？この子知り合いなの京太郎さん。ん？ていうか、あんた浩介？あれ、浩介だよな？」

「ね、姉ちゃん・・・。」

彼もそう呟くと、私の方を恐る恐る振り返った。

え？

・・・どうゆうこと？

第十三話：龍野觀加佐の介入

午後9時。

こんな時間に呼び出されたから、てつきり個人的な要件だと思っていたのに。

指定された場所はこの何もないただの通りで、しかも相手は他の女。愚痴を言っても仕方ない。けれど、彼は私の事を一体どう思っているのだろうか。

折角部室を抜け出したのだし、この際この足で彼のもとに行くのもありではないだろうか。

とにかく、あのやかましい連中を片付けてから考えよう。

「觀加佐ちゃん！準備いい！？」

猛烈な勢いで走ってくる集団の先頭で、見覚えのある顔が手を振った。

その言葉に眉をぴくりと動かしたものの、仕方なく手を振って返す。同時に、塀に立て掛けてあった一本の棒を手にとった。

長さは約2メートル。鉄棒程の太さで、黒く塗り固められた漆の下に僅かな木目模様が透けている。

それを水平に構えると、道の幅の2分の1以上を埋めてしまう。

「ありがとっ！じゃ、後はよろしく！」

「すまん！頼むぞ觀加佐」

集団から少し先行して走っていた二人がそれをくぐり背後に回ると、私は無言でうなずき深呼吸。

遅れてやってきた連中へ視線をやった。

「まてえええ！このアマ！よくも大石達をやってくれたな！」

「おまけにこの俺をだましてくれやがってもう許さねえぞ！地元チンピラなめんなよコラアア！」

「邪魔だ棒女！チンピラ魂みせたらあつぷがあ！」

走ってきた五人のうち一番前にいた男が拳を振り上げた瞬間、その

顎に棒の先端がめり込んでいた。

「その呼び名は失礼です」

「なっ!？」

こちらの動きが全く見えていなかったチンピラは慌てて足を止め、地面に倒れた仲間を見る。

が、更に棒を横に薙いだため、二人まとめて顔面にそれを食い。揃って壁にもたれかかるように倒れた。

「な、何だこいつ!？つうえっ!」

「ちょ、ちよつとまげっ!」

最後尾にいた二人は完全に足を止めてしまっていたので、仕方なく数歩近づいてそれぞれの顔面に突きを入れ気絶させた。

歯を数本へし折ってしまったかもしれないが、手加減しろとも言われていないから問題ないだろう。

「さつすが棒を持たせれば学園最強の龍野たつの 観加佐みかさ！五人を瞬殺。鮮やかだね」

「うむ。相変わらず副部長の棒さばきには惚れ惚れする。その動き、やはり一度詳しく解析して更なる進化を目指してみるべきでは・・・」

「お断りします。あなたの研究に付き合わされて一か月も暗い地下室で拘束されるのはもう御免です。それより葦名」

「ん？何？ああ、証拠を取ったカメラならしっかり持ってるよ」

「それは当然。それよりも、あなたさつき私をちゃん付けで呼びましたよね？」

「え、えゝ？ダメなの？」

笑顔でそう聞くと、棒を今度は垂直に持ち、どんと地面に突き付ける。

「会って最初にそう呼ばれて以来一度たりとも許したことなどありません。いい加減態度を改めないようなら、ここにもうひとつ屍を築くことに・・・」

「わ、わかったよっ！呼ばない！だから構えないで！睨まないで!」

「ふふふ。流石の輩名も冗談の通じん副部長には弱いな」

（弱いもくそもあれ本気の目でしょうがっ！この時期にこんなところに置き去りにされるなんて冗談じゃないよ！）

小声でマリアに反論していても、全部聞こえてしまっている。

彼女がこの程度で態度を改めるとは到底思えないが、今粘るのも時間の無駄だ。

私は壁際に置いてあったカバーに棒を包むと、背中に担いだ。

「では、ここは済んだことですし、部長たちの様子でも見に行きましようか。あなた達はどうしますか？一応部室の人手は足りているようでしたが」

「お？部長の所？それならあたしも行こうかな。今からなら丁度クライマックスに間に合うかもだし」

「ぬう？クライマックスとな？」

「何の話ですか？」

「むふふ」そりゃあ、傷ついた二人が出会い、励まし合い、その後となれば色々起こるのがこの世の常つてもものでしょう！ほんとに予定になかったけど、観加佐ちゃんが行くなら私が行っても部長に文句は言われないよね！」

こちらに目を輝かせながら振り向いた輩名。

その顔ににっこりと笑顔を返して私はしまったばかりの棒を取り出した。

「観加佐・・・ちゃん？」

「あ・・・」

「まったく・・・。あなたには少しお仕置きをしておいた方がいいようですね？」

「い、いや・・・、言葉のあやだよ！や、やめてええええ！」

「待ちなさい！」

逃げる輩名を追う際に、やれやれと肩を落とすマリアが視界の外に移り消えた。

「あんたたちのせいでお店から追い出されたじゃない！どうしてくれんのよこのガキ！」

「ケバいだけのおばさんに言われる筋合いはないわよ！あんたこそ猿みたいにキーキーうるさいから店員に間違われたんじゃないわけ！？」

「はあ！？調子乗ってんじゃないわよ親の脛かじって学園通ってるようなガキのくせして！自分で金も稼げないくせに大人に逆らってんじゃないわよ！」

「自分の弟を散々責めて部屋から出られなくした張本人のくせに何が大人よ！自分が何したかもわかってないような無駄年ぐらいがあたしにガキなんてよく言えるわね！？」

「お、落ち着いてマキちゃん！」

「めぐみちゃんもそんなにしわを寄せたらきれいな化粧が台無しだよ？」

「あんたもあたしがケバいつてか！？」

「え！？いや、そんなつもりは……。うわ！ちよつとま噛みつかないで！」

数分後。

うなだれる葦名にマリが肩を貸しながらやってきた場所には、いがみ合う糸瀬マキと島野めぐみ。それをそれぞれ抑えている谷内京太郎と折筈。そして、それらと少し場所を離れて溜息を吐く部長と暗い表情の谷内京花と島野浩介がいた。

「どうなってるの？これは……。」。

「ターゲットと排除目標。そしてそれを実行するエージェント。本来なら接触してはいけない連中が一堂にかいしているな」

「荒れてるねえ……。」。

呆然とその光景を眺めていると、マリが冷静に状況を自己分析し、葦名が顔をあげてわずかに楽しそうな口調で呟いた。

あれだけやっても復活するとは、侮れない。

とにかく、状況のつかめなかった私は思い切って部長に近づいて行

った。

部長は額を押さえながらしきりに溜息を吐いている。

「部長。これはどういうことですか？計画に随分そぐわれない光景ですが」

「む？ああ、龍野か。来いと言った覚えは無いぞ？」

「来るなど言われた訳でもありません。それに、そんな様子では帰れと言われてもただ帰るわけにはいきません」

私が強くそう言くと、部長は意外そうに顔を上げもう一度だけ溜息を吐くと「情けないな」と苦笑した。

「そうだな。情けないところを見せた。ハッキリ言って状況は最悪だ。ほとんど計画は失敗したと言ってもいい。ターゲットに尾行がばれ、そのはずみである二人とまで接触させてしまった。家庭面での問題は後々カバーしていく予定だったのだがこれで完全に浮き彫りになってしまったし、雰囲気からして学園での生活は何とかなるだろうと思ったが、これではそれもかなわんかもしれん」

言葉を続けるうちに部長の声色が暗くなっていく。つられてこっちまで溜息が出そうになるほどだ。

「それでお手上げだったというわけですか。確かに情けない話です。らしくありません」

「まったくだ。どうも今回は調子が悪くてな。だが、お前にそうも心配をかけさせておいては部長としては論外だ。何としてでも成功させる手を考える。手伝ってくれるか？」

少し責めるように言ったつもりだが、どうやらさっきの言葉だけで自分に喝を入れていたらしい。

返ってきた言葉にいつもの覇気を感じ、嬉しさが表情に出てしまった。

「ええ。お任せください。・・・ところで部長。現段階でいい策がないのなら、私に考えがありますが」

「考え？何だ？」

「用は家庭面の問題さえ解決してしまえば、あの二人はうまく助け

合って学園生活を送れそうなのですよね？ならば、今ここで家庭面の問題を解決してしましましょう」

部長は納得しきっていない。

言っていることはわかって、私が何をしようとしているのか想像がつかないのだろう。

そうさせているのはおそらく彼女。

自分でも気付かないうちに意識してしまって無難な発想しか浮かばない。

そんな所か。

まったく、そんなことで計画を駄目にしかけるなんて納得できないのはこっちの方です。

「話はわかるがどうやって・・・」

「とにかく！ここは任せていただきます！」

珍しい機会だ。

部長に私が貸しを作るというのもたまにはいいかもしれない。

第十三話：龍野観加佐の介入（後書き）

本当はこんなにも話を切る予定はなかったのですが、時間と予定の関係でこんなにも話数が伸びてしまいました。

どうせ伸びてしまったので、もう一・二話増えるぐらい気にせずしつかり終わらせようと思います。

無計画な作者で申し訳ありませんが、どうぞこれからもよろしくお願ひします。

第十四話：それぞれの試練

「あなた達。島野浩介と谷内京花さんですね？」

「・・・そうです。あなたは？」

「龍野さんですよ？こんばんわ」

部長から数歩離れたビルの入り口で、二人はお互いに背を向けてうな垂れていた。

声を掛ければ一応二人とも顔を上げたが、今にも死にそうな、正確には死にたいほど絶望した表情をしている。

男子の方は面識があつたようで、軽く礼をしてきたので首を振って答えた。その後すぐに俯いて同じように黙ってしまったが、呆れてため息が出そうになる。

私はその感情が表情に出ないよう意識しながら続けた。

「私は報道部副部ちゃん・・・ごほんっ！」
「・・・しまった。」

無言で背中の中棒を降ろし、いそいそとカバーを取る。

剥ぎ取ったカバーを投げ捨てると、気を取り直して棒を垂直に立て地面に叩きつけた。

「私は報道部副部長、龍野観加佐！あなた方には計画を変更し、私と手合わせしていただきます！」

「「・・・え？」」

目を点にしてそれだけ呟く二人。

私は構わず男子の方の胸を掴み後ろへ放り投げた。

「うわっ！」

彼は訳のわからないといった表情のまま、受身も取らずに引きずられ派手に転がった。

「な、何するんですかっ！？いきなり！」

「あなたの相手は私です。ルールはあなた方が私達に一発でも入れられれば合格。逃げようとしたら本気で潰させてもらいます」

棒を目の前に突きつけ睨みつける。

目の前の女子は完全に脅えきった目でこっちを見つめていた。

「こ、これがなんになるんですかっ!？」

「目的は先程までと一切変わりませんよ？ただやり方を変えただけですっ!!!」

言い終わるよりも早く棒を上段に構え振り下ろす。

予想通り身を強張らせただけの彼女は動くこともなく。棒はその右腕を掠めて地面に鈍い音を立て叩き付けられた。

「次は当てますよ」

感情を押し殺し、本気の恐怖を与える。

声も出せず地面にへたり込んだ彼女を見下ろしながら、私は次の一撃を構えた。

「待つて!」「待ちなさいよ!」

そこに被る二つの声。

振り返ると、こっちを睨む男二人の間から糸瀬マキがこっちに飛び付いてきた。

「どおゆうつもりよ!!!京花を殺す気!？」

「そんなわけがないでしょう。彼女達の家庭面の問題を引きずり出してしまった以上。今ここで手を打ってしまおうとしているだけです」

怒鳴る彼女に呆れながらも周囲に聞こえないよう小声で話す。周りから見れば胸倉をつかまれながら小声で話し合う妙な形になっているだろう。

「それがなんでこうなるのよ!新史といいあんたといい報道部の連中はどうしてこうわけわかんない解決法ばかりしようとするわけ!？」

「戦闘と言う普段無い条件を作ること、お互いの見えない一面を見せる機会を作ろうとしているだけです。というか、あなたは部長であり学年も上の人間を呼び捨てにしていると思ってるんですか!？その態度こそ私にはわけがわかりません!？」

「そ、そんなの今関係ないじゃない！大体あんたと京花の意外な一面見せ合ってどうすんのよ！？」

「子供が危険になれば助けるのが家族でしょう？彼女が襲われれば彼女の親も勝手に参戦してきます。あなたは男子の方の姉を頼みますよ。男子が焦って助けに入るぐらいはやし立ててやって下さい。心配せずともあの女子には手加減もします」

そこで会話を打ち切って女子の方へと向き直る。

「さあ。いきますよ！」

が、誰もいない。

私達が言い合っている間に、彼女はとつくに立ち上がり逃げ始めていた。

「待ちなさい！逃げたら本気で当てると言ったでしょう！？」

「だから逃げ切ろうとしてるんです！！！」

最もだ。

しかし、逃がすわけにはいかない。私はすぐにその後を追ひ、ビル二棟分も走らないうちにその襟首を捕まえた。

「は、放して下さいっ！私が何したって言うんですか！？」

「何もしてないから問題なんです。こうなれば、その弱りきった根性を叩きなおしてしまうというのでもいいかもしれませんね。その方が確実ですし」

「や、やめろっ！」

手足を振るだけの抵抗を無視して彼女を押さえつけていた手が掴まれた。

やはり来ましたか。

私がそう思い振り向くと、そこには息を切らしてこっちを睨む男子の姿があった。

「あ……、あら？」

「……お願いです。決闘でも何でも俺が引き受けますから。彼女に、手を出さないでください」

「………浩介」

「え、えーと……。あなただけ？」

「はい。俺が引き受けます！」

「いえ、そうじゃなくて……」

真剣な目でこつちを見つめる男子。その後ろに更にこつちへ向かってくる人影は無い。

こ、これは想定外だ……。。

「なるほど成程。観加佐ちゃんにしては随分大胆な作戦だけど、面白そうだね。吊橋効果の親子版ってどこ？」

「非日常的な状況下に置くという点ではストックホルム症候群の応用とも取れるな。しかしまあ、現時点で既に誤算が生じておる様だが」

葦名と筑紫場が龍野を追っていった島野を眺めながら他人事のような顔で雑談していた。

しかし、確かに龍野の立てた計画にしては大胆だ。

それに、彼女にしては珍しく先走り故のミスも多い。

原因はわかりきっている。俺だ。

彼女に励まされたおかげで調子を取り戻すつもりだったんだが、どうやら余計な心配までさせてしまったらしい。

部長としての面子を取り戻すためにも、ここはしっかり彼女の計画をサポートするだろうか。

「何あの子？あんな棒持って通り魔？こわ。ねえねえ京太郎さん。あんなガキ連中ほつといて続きにしよう。まだ今度の買物物の相談もしてないし」

「う、うーん。そうだね……。でもやっぱ俺助けないといけないじゃないでしょ。娘が襲われてんだからさ？」

「えー？いいじゃん。どうせ子供も同士のことでしょ？ほつといたって大したことになんてなるわけないって」

「い、いやー。でもね……。そうかなあ？」

「その人の言う通りですよ。彼女は彼女達でやることがあります」

体をくねらせながら猫なで声で谷内京太郎にしな垂れかかる島野めぐみ。

俺が二人に歩み寄ると、島野めぐみは一瞬怪訝な顔をしたが、直ぐに笑顔になって谷内京太郎の手を取った。

「ほらね？言った通りでしょ！じゃ、あたし達は別の店行つて続き・
・」

「それも困ります。あなた達にも、ちゃんとやつてもらわなくちゃいけないことがありますから」

俺が声を遮ると、即座に肩を落とし島野めぐみがこっちを睨んだ。
「ほんつとにうるさいガキどもねっ！あんた達の遊びに何であたし達が付き合わなきゃいけないのよ！？」

「理由は簡単。・・・葦名」

「はいはい」

合図すると、葦名は笑顔で数枚の写真と何枚かの紙切れ。

それを見た二人の表情が見る間に青くなっていった。

「むふふ。見てわかる通り二人が一緒に飲んできるところの記念写真や旅行に行ったときの写真。ついでにこっちはホテルのメンバーズカード。いやあ、お盛んですね」

それに鞭打つかのような笑顔で説明する葦名。毎度々こういう時は本当に生き生きしてるなこいつは。

「な、何故それを・・・」

「その理由も簡単。我々が報道部だからです。さ、これで逃げられませんか？あなた方の相手は俺が勤めさせてもらいましょか」

指を目の前で左右に振り、そのまま二人に突きつける。

これで場は整ったと思いきや。

「ふ、ふざけるなっ！そんなものは偽者だ！それ以上大人をからかえばどうなつても知らんぞ！」

「え？きやあっ！ちよつと！」

逆上したのか、顔から滝のような汗を流しながらも真っ赤にした谷内京太郎が葦名へ猛進して来た。

即座に葦名を羽交い絞めになると、強引に写真とカードを取り戻そうと手を伸ばした。が、

「うざいわよ。糞親父」

マキがその手を掴み、捻り上げた。

さっきまでと違い低く冷たい声で谷内京太郎を一瞥すると、葦名から引き剥がし地面に蹴り倒した。

「うぐわっ！き、君は一体・・・！大人になんてことをするんだい！？」

「自分の娘が襲われてんのに「助けた方がいいよね？」「そうかなあ？」！？それでも親かつ！？ぶちぎれたわ。新史。こいつらの相手なら手伝うわよ」

一瞬だけ怒鳴ると、静かにそう言っただけで彼女は倒れた京太郎を見下ろしていた。

「どうやら。こっちは準備が出来たようだな。では私は副部長の加勢にでも行くとするか」

「ああ。頼んだ筑紫場」

振り返らずに手を振る筑紫場を見送り、振り返る。

地面に倒れたままやや後ずさりマキを見上げる谷内京太郎と、それを微動だにせず睨み続けるマキ。その二人とこっちを順々に見ながら困惑した表情をする島野めぐみ。

俺は一度メガネに手を掛けると、三人に歩み寄った。

「さあ、覚悟はいいですか？」

第十五話：お仕置きその1（前書き）

作者テスト期間中のため若干の更新速度遅延気味となります。
どうかご勘弁を。

まあ、それでなくてもおそいのですが。

第十五話：お仕置きその1

龍野の計画は既に狂ってしまったが、目的さえ達成できれば結果オーライだ。

自分達の心のよりどころを手に入れた彼女らに足りないのは他人を怖がらない自信。そして、今の状況を造る要因となったものを乗り越える事。

用はトラウマの克服だ。

本来ならそのトラウマを乗り越えて自信をつけさせたいところだが、彼女らはすでにこの二人と向き合うことすら拒絶している。向き合うには少し手を加えないといけない。

自信の方は龍野に任せるとして、このトラウマどもにはしっかりと凹んでもらおうか。

その後それを取り越えられるかは彼女達次第だ。

「覚悟しろだ？ お前らみたいなガキがそんなもの見せびらかしたところで信じる大人がいると思うのか！？」

谷内京太郎はようやく体を起こし土ぼこりを払いながら叫んだ。

しかし、その前に大袈裟に地面を踏みつけてマキが立ちふさがる。

「そんなもの？ それをたった今躍起になって取り返そうとしたのはどこの誰なのよ。あれが本物じゃなくなたって見られて困るものだったことはあんたが十分証明しちゃってんの！ いつまでもうだうだぬかしてんじやないっ！」

「くっ！ うっうっ……」

二十歳に満たない女子大生に睨まれて引き下がる三十後半の大人。あれは見習いたくないな。

彼は典型的な子供に興味がない親だ。彼女が中学生に上がった頃までは良かったが、その後家庭を無視し遊び呆ける行動が目立ってきた。

その結果。谷内京花は自分に引け目を感じ他人に劣等感を抱くき

っかけを作ることになった。

これは正攻法で行こうとは思っていない。

個人的にこの手の大人は嫌いだ。

よってそれなりの目にも会ってもらう。

問題は……。

俺が視線を向けると、島野めぐみはまるで待ち構えていたように口を開いた。

「あいつに頼まれたの？あたしに仕返しでもしてくれって」
落ち着いている。

それだけで少し意表を突かれた。

あれだけ自分勝手なそぶりを見せ、ここに来てはまだ喚き散らしてくると思っていたのだが、どうやら向こうにも何か思うところがあるらしい。

「……手間が省けましたよ」

「は？何言ってるのよ？」

「思ったままの事を言っただけです。あなたを彼に向き合わせるところから始めずに済みました」

島野浩介の対人恐怖症と言えるものは彼女の彼に対する言動が原因だ。

自転車に乗れた。

友達の家遊びに行った。

誰かとどこかへ行った。何かをした。

例えば些細なことでも彼にとつての嬉しい出来事を彼の幼いころから彼女は見下し否定してきた。

「だから？」「当然じゃん」「あつそ」「くだらない」「キモイ」
彼女にとっては幼く煩わしい彼をあしらうための何の躊躇いもな
く言っただけの言葉が、彼の精神を傷つけ続けた。

勿論それらはただのきっかけだ。彼自身にも今に至った原因はある。

だが、それが未だに彼の乗り越えない壁にならない壁になって

いるのも確かだ。

マキが谷内京太郎に睨みを効かせ押さえている間に、俺が知りえる島野めぐみが弟へしたことを話しながら歩み寄っていく。

相手が近づけばそれだけ視界の範囲に余計なものを挟めなくなり、相手から視線をそらしにくくなる。

それでも顔をそむけて片腕で体を抱く彼女は相当俺と話したくないことがあるということだろう。

「何か間違いでもありましたか？」

黙られても困るので最後にそう問いかける。

彼女は苦々しくこっちを見上げ、それでもはつきりと言葉を発する。

「やつぱり。だからあいつは恨んでるんでしょ？あたしに仕返ししたいんでしょ！？知ってんのよ？あいつの部屋によく来てるのってあんた達でしょ！？だからあいつの方持ちたいんでしょっ！？」

最後には叫びながら。彼女は俺を睨み上げた。

俺は知っている。

なぜ彼女がここまで声を荒げ、俺を睨み、その胸中にどんな思いをしまっているのか。

だからこそ、この先を言っていいたいものか迷いが生じてしまう。

彼女さえも知らない情報を、彼も知らない情報を、知り過ぎているために迷ってしまう。

思わず顔をそらしてしまい振り向くと、葦名も俺の気持ちを理解してか複雑な表情を浮かべている。マキと谷内京太郎も何事かこっちを見ていた。

視線を戻す。

彼女はさっきよりも強くこっちを睨み、黙ったままだった。

情けない。ここまで来て悩むなんて。

今日は本当に調子が狂いばなしだな。

自分にまたも溜息を吐いて、意を決した。

「仕返しではありません。そんな必要などないほどあなたはもう後

悔している」

俺の言葉に睨んでいた目が少し緩む、その表情からはやっぱりかという呟きが聞こえてきそうだった。

「引き籠りで誰とも話そうとはせず、家族にさえろくに顔を見せず、そんな大嫌いな弟をそうした原因が自分にあつたと気づいた時、あなたはひどく後悔した。何とか元に戻そうと部屋から無理やり出そうとしたり自分の友達を連れてきたり、果ては知らない女の子と二人きりにさせたがうまくいかず。逆に彼の症状は悪化していった」

「・・・やめてよ」

俺が言葉が続けていくと、その視線が徐々に落ちていき、俯いたまま彼女の弱々しい声がした。だが、俺は更に続ける。

「あなたは必至だった。自分のせいで弟をダメにしてしまった。自分が弟を救わなきゃいけない。しかし、その反面今まであしらってきた彼に対して急に態度を変えることもできず、助けようとしながらもあなたは彼を避けていた。同じ家においても鉢合わせ無いよう外出することも多くなり家にも戻らないことがしばしば。それによって親との仲がぎくしゃくしてもあなたはそれを変えなかった。変えられなかった。そうしてほとんど家族自体と距離をおいて生活していたある日、状況が一変した。そう・・・」

「やめてよっ！！！」

今度ははつきりと、それこそ周囲に響き渡るほどの声で彼女は叫んだ。俯いたまま、僅かに肩が震えだしていた。

「俺達が来た。今まであなたがまともな会話すらできていなかった弟とあつという間に仲良くなって外に連れ出し、バイトまで始めさせてしまった。あなたはそれによって弟を元に戻すという呪縛から解放され、同時に目標を見失ってしまった。自分の責任だと思いつけ、家族との関係を悪くしてもやろうとしたことを俺たちにあつさりと奪われ、あなたは彼を完全に拒絶した。弟でもなく、家族でもなく、ただの島野浩介。一人人として扱うことにした。何もしてあげられなかった後悔と、せめてもう一度同じようなことが起こら

ないように。そうですね？」

酷だとわかっていても、最後まで言い終えた。

彼女はいつの間にかその場に崩れ肩を揺らしている。あれだけ悲痛な悲鳴を上げてても耐えていたものが溢れてしまったのだろう。

無理もない。正直俺が顔をそむけた時はこっちが先に感傷に浸ってしまいそうだったからだ。

「めぐみちゃん・・・ぐわっ！」

後ろから谷内京太郎の声と足音が聞こえたがマキに足払いでも食らったのだろう、すぐに派手な音と短い悲鳴が聞こえ静かになった。とりあえず、ここは彼女が落ち着くのを待とうとその場を離れようとした時、ズボンの裾が何かに引っかった。

「待ちなさいよ。それだけ言っというただ帰るんならやっぱり仕返しよ・・・。お仕置きとかいうのは別なんですよ」

それは島野めぐみの手だった。

彼女はごしごしと顔を拭くと、立ちあがり俺に挑戦的な笑顔を見せた。

それには照れ隠しも見て取れたが、まさか笑顔まで見せられると思っただけだった俺は内心の驚きを表情に出さないよう努めながら彼女と再び向き合った。

「そうですね。今のは単なる前置きです。あなたに対するお仕置きは、時間の没収です」

人差し指を立ててそう言うのと、彼女は思いつき怪訝な表情で凝視してきた。頭おかしいの？とでも・・・。

「あんた頭おかしいんじゃないの？」

やっぱり言ってきた。

「正確にはあなたが今まで谷内京太郎と過ごしていた時間をうちの部室で過ごしてもらいます。あなたの弟に対する態度を変えてもらうには一日二日じゃ足りなそうですからね」

「はあ！？あたしにあんたたちの大学に通えつての！？」

「別に学生じゃない人間が学園内にいるのは珍しくありませんよ？

うちの学食なんかは安いこともあつて近くの不動産の職員なんかも利用しによく来ますから」

「そ、そんなことじゃないわよ!? そんな面倒くさいことするわけないでしょ?」

「じゃあさっきの話。あなたの友人知人に手当たり次第言いふらしますね?」

「はあ!?!?!?」

「俺達は容赦しませんよ? お仕置きですからね。何なら昔の同級生、担任なんかも入れますか? あなたが大っ嫌いな理科教師の・・・」

「わ、わ、わつかたわ! 行くわよ! 行けばいいんでしょ!? 行くから止めて! 頼むから!」

さっきまでの威勢はどこへやら、慌てる彼女に満足すると俺は踵を返した。

マキと谷内京太郎は突つ立つたまま呆然としているが、葦名も満足そうに微笑んでいた。

これでしつかり彼女が部室に来るようになればとりあえずは成功と、そこでマキが突然駆け寄ってきた。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ! まさかこれで終わりじゃないでしょうね!? こいつどうすんのよ? あたしの出番は!?!」

「焦るな。両方ともこれからだ」

そう言つて谷内京太郎へと向き直ると、彼はびくつとして後ずさつた。

なんとも情けない。

だが、何故か心が弾む。

ちよつと今のでテンションが下がり気味だったのだから丁度良い。それを悟つてか、葦名もいつの間にか隣に並んでいた。

「待つてました! これぞ私の出番だよね!?!」

「流石。こういう場面は目ざといな。だが、やり過ぎるなよ?」

「やり過ぎ? 何いてんのよ。あたしだってこの時を待つてたんだから。容赦なんかするわけないでしょ?」

俺たちのやり取りにマキは腕を鳴らしながら入ってくる。

三人にそろって睨まれた谷内京太郎は最早動けずその場に固まっていた。

やれやれ。

「ま、自業自得だ。恨むなよ?」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4925h/>

壮学報道部物語

2010年11月20日02時46分発行